目次

佛教の信仰……日生上人
日蓮教學講座（第十二回）……河合陟明
日本精神運動と聖日蓮（中）……和賀義見
法華經講話（第九講）……小林一郎
記事
○團報と教信
○寄附團費誌料領收

第三十九年九月號

財團法人 統一團趣意

統一團ハ創立以來實ニ三十有餘年ヲ經過ス其間内ニ佛祖正脈ノ法統ヲ闡明シ外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向上發展ニ貢献セリ此ノ光輝アル歴史ハ決シテ他ノ追隨ヲ許サヾル所ナリ

統一團ハ本團自身ノ活躍ノ外本團ガ母體トナリテ幾多ノ子會ト事業トヲ産出セリ其ノ首ナル者ニ就テ見ルモ天晴會アリ地明會アリ講妙會アリ自慶會アリ又知法恩國會等アリ其街頭宣傳ノ如キ炎々タル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ與ヘタルヲ見ン　又著述出版ニ於テハ大藏經要義　法華經要義　日蓮主義精要　聖語錄等著書ノ量ハ實ニ等身ニ超エ雜誌トシテハ毎月統一ト教トヲ發行シ來レリ

統一團ハ過去ニ於テ如斯多大ナル法動ヲ有スル名譽アル正定聚ナルガ創立者本多日生上人遷化後其遺命ヲ遵守シ進ンデ法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ將來ニ向ツテ重大ナル任務ヲ敢行セント欲ス　其中心ノ事業ヲ擧グレバ

第一 佛祖正脈ノ法統ヲ擁護スル事　**第二** 我國精神文化ノ精髓ヲ體系的ニ發揮スル事　**第三** 此ニ適當スル學風ヲ振起スル事　**第四** 時代對應ノ教化ヲ研討シテ之ヲ實行スル事　**第五** 小ニシテハ日蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文教ノ爲ニ毎ニ覺醒ヲ促シツヽ嚴然トシテ統一ノ學風ト教化トヲ守持スル事是レナリ

教旨ノ正明　研學ノ闡達　活動ノ旺盛

此等ハ統一團ノ標語ナリ

定ニ佛祖ノ法統ヲ擁護シ我國ノ精神文化ヲ闡明シ此ニ適スル教學ノ特色ヲ永久ニ持續セントスル本團事業ノ翼贊ハ最モ根本的ノ大善事ナルベシ　希クハ同感ノ士女奮ツテ贊同アラン事ヲ爲法爲國爲一切衆生切ニ願望スル所ナリ

本團略則

◎**目的**　本團ハ日蓮教學ノ心髓ヲ講明シテ佛祖正脈ノ法統ヲ維護シ我國精神文化ノ精髓ヲ發揮シテ國民精神ノ根柢ヲ培養シ立正安國ノ大義ヲ宣揚シテ以テ理想ノ文明ヲ建設スベク街頭布教並ニ教化講演會ヲ開催シ又月刊雜誌『統一』ヲ發行ス

◎**維持員**　本團ノ事業ヲ翼贊シ一時金參百圓以上又ハ毎年金拾圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ維持員トス

◎**贊助員**　一時金百圓以上又ハ毎年金五圓以上ヲ寄附セラル、方ヲ贊助員トス

◎**正團員**　一時金參拾圓以上又ハ毎年金貳圓五拾錢ヲ醵出セラル、方ヲ正團員トス

◎**入團**　御希望ノ方ハ寄所氏名ヲ明記シ適當セル金額ヲ添附セラルレバ本誌ヲ無料ニテ頒布シ團章壹個ヲ贈呈ス

◎**誌友**　統一誌ヲ購讀スル方ヲ誌友トス

佛教の信仰

妙法蓮華經如來壽量品第十六

我れ常に此に住すれども、諸の神通力を以て、顚倒の衆生をして近しと雖も而も見えざらしむと

南無妙法蓮華經。

これより信仰に關してお話をするのでありますが、第一には宗教信仰の必要、第二には佛教の卓越せる所以、第三には佛教信仰の歸結に就て申述ぶるのであります。先づ宗教信仰の必要に就て言へば人間の眞實の幸福は、宗教の信仰に依つてのみ得らるゝのであります。自己の生命は永久不滅でありその生命の内容は佛性と同じものを具へ、信仰に依つて悟を開き、佛樣に成ることが出來るのである。又佛樣に依つて慈悲の御護りを受けて居ることを確信致しますると、其處に法悅歡喜の心が湧いて、如何なる人生の苦みをも打消すことが出來るのであります。ソーシテ其の喜びの中より道義的感情が動いて必ず善い事をする人となります。この信仰法悅の滿足と、道義的の願行とに生きる事が出來るのが、宗教信仰の力であり、同時に信仰の必要は頗る明かなことであります。

近來宗教信仰の必要が官民上下の間に認めらるゝやうになつたのは、寔に慶賀すべき事であります。更に此の考を徹底せしめて、之を國策の根本として確立致したいものであります。

★本多猊下の御吹込になりましたレコードを、今回擴大複製して其内容を耳にし、一層深い新なる感激を與へられました、殊に大震災の記念日に際し、人心の自覺、宗教の信仰に俟つべきと想ひ、此例り特に掲げさせて頂きます。★

第二に佛教の卓越せる所以を一言致します。佛教を開かれた教祖釋尊は、世界あつて已來全人類の中に於て最も完全なる人格を備へたまひ、御慈悲に於ても、御智慧に於ても、御活動に於ても、一點の申分なき尊い御方であります。ソレ故に、其の教は眞理の側から見ても、道德の側から見ても、又宗教の側から見ましても、頗る整頓せる理想的の教であります。その教義は一一達磨即ち法に照して示されたので、決して獨斷的のものではありません。殊に人の心を明かにして、精神生活の妙味を教へ、上中下根の差別なく、恰も日の世界を照すが如く、高き山も低き土地も普く其の光を與へたまひ、又雨の草木を潤ほすが如くに、大きな木も小さな草も、悉く其の潤を受けて生長するが如くであります。其の教ひは世間の樂及び涅槃の樂を與へたまふのであつて、現在生活としては變化多き複雜なる人生に處して如何なる場合にも信仰法悅の喜びに立たしめ、又善根功德の志を奬勵して、善き人、樂し人として この世を送くることが出來ます。而して人生の終りに於ては、常樂我淨の佛身を成就せしめ、永遠不滅の大果報を受けしめたまふのであります。

されば我國に於ては聖德太子を始めとして、歷代の朝廷に於ても、又津々浦々の國民に於ても、一齊に教主釋尊の御教を信奉して、篤敬三寶の國風を造つたのであります。明治維新後佛法興隆の國策を忘れたのは、大なる失態であつて、其の結果は人心の頽廢思想の惡化として現はれ、こゝに上下齊しく佛法興隆の事を覺醒するに至つたのである。この覺醒を徹底せしめねばなりません。

○　○　○　○

第三に佛教信仰の歸依に就て申述べたいのであります。佛教を信ずるには方便眞實の見分けが大切であります。佛教の一部分に沒頭しては、決して佛樣の御本意は分りません。ソーシテ佛教信仰の歸結は必ず法華經の教義に從はねばなりません。法華經は正しく佛教信仰の歸結を教へたものであります。それ故に信仰の對象に就ては、釋尊を絶對的中心の本佛として顯はし、本佛としての釋尊は恰も天の一月萬水に影を浮ぶるが如く、三世に十方に種々に應現さるるのである。その本體に歸れば絶對統一の佛、その應現に從へば千變萬化限りなき自在の活動であります。この統一の本佛を顯はして、彼の時間的中心として釋尊を尊びし小乘、彼の空間的中心として釋尊を尊びし權大乘の教を、綜合歸結されたのであります。ソーシテ我等衆生は悉く佛性を具へ、その佛性は顯はれんとして動き、其處に佛子の自覺の起るべきを教へ、下にはこの佛子の自覺を喜び、上には本佛の感應を仰ぎ、この本佛の慈悲と我等の信仰とを結合する其處に、南無妙法蓮華經と唱へしむるのである。南無妙法蓮華經は佛よりすれば救ひの綱であり、我等の信仰はその救ひの綱を握る手であります。歩々念々本佛を渴仰し、佛子の自覺に立ち救ひの綱を放さず南無妙法蓮華經と唱へ、その法悅の中より願行を立てゝ、立正安國皆歸妙法の大目的に向つて進むのが、佛教信仰の歸結であります。

（第四面の日蓮聖人聖訓は省略）

日蓮教學講座（第十二回）

文學士　河合陟明

★★★★★★★

我が滅度の後、能く竊かに一人の爲にも、法華經の乃至一句を說かん、當に知るべし是の人は則ち如來の使なり、如來の遣す所として如來の事を行ずるなり、何に況んや大衆の中に於て廣く人の爲に說かんをや…諸の聚落城邑に其れ法を求むる者有らば、我皆其の所に到りて佛の囑したまへる法を說かん我は是れ世尊の使なり、衆に處するに畏るゝ處無し、我當に善く法を說くべし、願はくは佛安穩に住したまへ、我は世尊の前、諸〻の來りたまへる十方の佛に於て、是の如き誓言を發す、佛自ら我が心を知しめせ（妙法蓮華經）

★★★★★★★

佛教の本尊佛を大聖釋迦牟尼如來に決定す

第二回汎太平洋佛教青年會大會の記

人類文化の黎明がアジアの地に發してより五千年東西幾多の民族と文化が、或はインド河及び恒河の流域に、或は黃河及び揚子江流域に、或はエヂプトのナイル河口のデルタ地域に、或はレバノン山脈と死海のほとり、フエニキア及びヘブライの地に、或はチグリス、ユウフラテス兩河に挾まるメソポタミヤ平原に……その初、中央アジアのパミール高地——世界の屋根なる人類發現の此の地より、始めて四方に足跡を印せし人類の移動は、東、アジアに、西ヨーロッパに、南、アラビヤ及びアフリカに、それ〴〵移動し分布して、原始的生活狀態よりしだいに發展して文明的社會生活を營むに至り、大河流域のこれらの地には、肥沃なる平野に惠まれて農作物の豐熟を來し、生活の餘裕と人口の繁殖とよりして、やがて燦然たる種々の文明を實らしめたのであつた。

而てこれらの諸種文明が、しだいに接觸交涉しつゝ、殊に諸民族の政治的國家的勢力の轉變と伴つて相互に種々なる影響を與へ、又抱合し溶解せられてやうやく地上——はた人文史上の二大潮流を成し來たるに至つた。その初め河川の流域に咲き誇りし各〻孤立的文明は、西方に於ては、いはゆる古代東方諸國が、次第にアッシリヤ・バビロニヤ・ペルシヤ・ギリシヤ・ローマ等の民族乃至は國家に、或は武力的に或は文化的に、征服されまた抱合せられて、こゝに河川文明より、地中海文明へと移動するに至りギリシヤを母胎とするヘレニスチック文化と、ユダヤを故郷とするキリスト教文明とが、或は結び、或は離れつゝ、その他の文化的及び政治的諸勢力が、この地中海沿岸を舞臺として、種々に角逐せられたのであるが、中世より近世にかけて、しだいに舞臺は太西洋に移動するに至つた。

他面、東方に於ては如何、まづ印度太古の文明は初、自然を崇拜し多神を讃美せしヴエーダの宗教思想が、しだいにブラーマナ（梵書）及びアーラヌヤカ（林書）に見る如き神秘なる奧義を傳ふる哲學思想を促し來り、ウパニシャッドの思想に至つてはすこぶる深遠なるものとなり、これが組織的體系化を

形成せんとして、進んで諸派哲學の勃興を促し、これと同時に印度古來の特質たる宗教的解脱の要求のうたゝ盛なりし時に當り、大聖釋迦牟尼佛は出現したまひ、これらの史的及び社會的背景のもとに、求道修行――瞑想多年、つひに一大妙覺を發得したまひて、こゝに世闇を破るの大光明となり、迷夢を覺醒するの大理想となり、かくて偉大なる救主佛陀――久遠の法ダルマ――和合の僧サンガ、三寶不滅の佛教勢力は、佛涅槃の後、小乘より大乘へと思想信仰的發展を來しつゝ、この間、しだいに西域諸國へ傳播しながら、佛滅一千年やうやく支那本土に渡來するに至つた。

こゝに於て、これに先だつ二千年、南北――河江の二大流域に、古くは三皇五帝より、堯舜禹王、文武周公等、乃至孔孟或は諸子百家の學の、春秋戰國に輩出したりし、支那文化の華は、こゝに異邦の一大文明と接觸して、やうやく兩者の合流を來し、

かくて教學の盛を見ること五百年、先に儒教文化を傳へ受けし皇國日本には、今やまた佛教文明を――しかも西域、支那の文化を濾過したる多面的佛教文化をも受け入るゝに至つたのである。而てこゝにあらゆる文化包容と同化統一の藥液を有てる日本精神は、東洋の偉大なる遺產を自家の寶藏に賞玩すること幾星霜……その間に、西歐に流動せし文化の勢は、近世諸國家の世界政策につれて、やうやく太西洋より太平洋に進み來つた。果然この第一聲は、萬里の波濤を破つて、浦賀――品川灣頭に轟き、多年鎖國の夢を貪りゐたる日本民族を驚かし、つひに維新開國の世界的舞臺に乘り出さしめるに至つた。ヨーロッパ諸國の岸を洗ふ水が、日本橋下の流れに通ずるが如く、泰西文化は澎湃として我れに入り來つたが、思想貿易六十年、今や東西文化が我れに於て渾然錯綜しつゝ、やうやく民族固有の同化力を以てその融合統一に向はんとしつゝある時、一大國際的事件は端なくも濃霧の一角に起り、こゝに日本は、內には皇道精神の復活を促し、外には國際政局の中心となるに至つた。

人類の發祥地たるユーラシア大陸の、人間心靈を支配し來つた思想の勢力は、今や三大分されてゐる東は佛教、中はマホメット教、西はキリスト教、而てキリスト教的ヨーロッパ文明は更に西――太西洋を渡つてアメリカ大陸に及び、加ふるに地上第一の經濟力を以て世界に覇を唱へんとしつゝ、太平洋の東岸に倨傲なる姿を構へ、他面、アジアの諸民族が產出せし種々なる文明は、このアジア大陸を抱くが如き日本帝國に最も榮えて、文化的にも政治的にも名實共に東洋の盟主たるの地歩を確立し、同時に日本の精神的自主權恢復を契機として、今やアジア諸民族の間に、一大民族的――否、人種的自覺、然り而て又、一大文化的、宗教的自覺が喚起されるに至つた。　アジア民族の更生と東洋文化の復興！

それは人種平等と世界平和への前衛である。公明不偏なる――人道正義確立の必須の前提である。

おゝアジアの民よ、卿等の心を一つに結びつけるものは何であるか。卿等よ、卿等は答へる――それは「佛教」である！と。佛教――それは東亞の光であり、やがては西歐の光ともなるであらう。

現代――世界史上の太平洋時代、果然……

太平洋時代は『佛教時代』である、と今やこの叫びが人類の間に――然り、たゞに東亞の民だけにでなく――西、ヨーロッパの識者よりすらも稱へ出さるゝに至つた。かの地の諸國の佛教研究熱はうたゝ盛となり來り、種々なる大學に佛教の機關雜誌は發行せられ、政府も或は研究施設に、或は探見發掘に……久しくキリスト教に陶醉し沒頭しゐたる彼等の心境には、今や新たなる東方の光がゆくりなくもさしかゝり來つたのである。

三千年の昔より、大聖佛陀の光明に浴しゐたる

——東、アジアの民が、どうして今や惰眠を貪ることができやう。衣裡の寶珠を發見して起て！如來の大慈悲に——偉大なる慰藉と活力とを滿喫して立て！

人類救濟の聖業は——佛陀の光明によりて！

佛敎の世界的一大躍進の今『佛敎復興』——の聲高き今、かの西歐に於て中世より近世への一大轉換を齎せし『文藝復興』にも比すべき、『佛敎ルネッサンス』——彼は、神中心のキリスト敎より、人間中心のギリシャ文化への復興であつた。此は、人智に傲りし近世思想より『佛陀に還れ』『佛陀中心』への、一大宗敎的精神運動である。彼は中世キリスト敎信仰時代に、人々が陷りし『無智と迷信』よりして、ひるがへつて人類知識の寶庫を尋ね開かんとしたのであつたが、此は、人智の內奥を探り極めて、その無盡藏なる無限の行先に、人智の發展を究竟超越したる——大覺佛陀の菩提の殿堂に額かんとする、謙虛なる而も力强き、而で決して期待に裏切らるゝことなき、無限向上の進歩の叫びである。

果然この時、汎太平洋佛敎會議は、我國に於て開催せらるゝの運命を見た。そは、『佛誕二千五百年紀念』といふ前提の下にである。もとより我等は、この事に關しては大いに論なきに非ずであるが、佛敎が國際的世界的に進出せんとするの今、これに對する論評は旦く措き、かゝる有意義なる國際會議は、實に双手を擧げて贊成せざるを得ない。この會議は既に四年前、第一回大會をハワイに於て行つたのであるが、當時は參加國僅かに五ケ國に過ぎず、その人員も亦少かつたが、今や第二回は、名實共に汎太平洋佛敎會議として、否太平洋に限らず印度洋をも含めて、實質上に於ける最初の『國際佛敎徒大會』として、我が日本を中心に、內地はもとより、北海道、臺灣、朝鮮より、印度、セイロン、シャム、ビルマ、中華、滿洲、西藏、シンガポール、マレー、

ジャヴァ、ハワイ、アメリカ、カナダ等々、十四ケ國代表が、一堂に會して、佛陀の慈光の下に、或は國際會議を、或は國際交驩を行つたのである。就中東洋の佛敎國たる我が日本を始め、印度、セイロン、シャム、ビルマ、滿洲等の諸代表は、最も熱心に佛敎そのものの爲に、心を致し力を盡し、この一大正法の興隆宣揚復活に努めたのであつた。名は青年大會ではあるが、佛敎界の耆宿を始め、敎界の名僧知識、敎授、學者等、著名の人士多く此に出席したのである。これ實に佛敎大會であると同時に、世界宗敎大界への前衛であるのである。

予は此大會に統一團を代表して出席した。本大會は全日本佛敎青年聯盟が主催となつて行ふのであるよつて規約により、予は直ちに統一團をして聯盟に加盟せしめ、同時に本團代表として此大會に於ける發言及び決議の權を獲得したのである。

七月十七日、午後三時より九時まで、日比谷公會堂に於ける各國代表歡迎の夕には、それら代表の紹介と挨拶あり、更に、我國藝術の種々相が、青年子女或は藝術家等によつて行はれ、佛敎徒交驩の第一聲を擧げたのである。

明くれば七月十八日、大會第一日、この日朝來雨天ではあつたが、會場なる築地本願寺を目指して參會者は續々集り來つた。午前八時より參會者の登錄を終るや、いよ／＼九時十分より開會式は行はれた。奏樂裡に、役員、各國代表、顧問、來賓、新聞記者、傍聽者等、一千數百名が、所せきまでに本堂の座席を埋め盡した。各國代表には、僧侶あり、學者あり、學生あり、青年あり、女子あり、中にも印度の一長老は黃の法衣を全身に纏ひ、芭蕉の如き團扇を持てるあり、白法衣を纏へる青年沙門あり、白布を頭に卷いて脊に垂らせる印度敎徒あり、或はビルマ代表の一婦人は我國の昔にでもしてゐたる如きかづらを冠れるあり、西藏や滿洲の奧安、熱河の奧

地より來れる喇嘛僧の如きは、赤或は褐色の法衣に赤銅の腕を出せるあり。顏の色及び形も種々樣々にて印度、セイロン、シャム、南洋等はまことに黑く、シンガポール代表は白皙の細面、ハワイ、アメリカ代表等は、彼の地生れの第二世日本人なれば、顏貌體格に異りはないが、さすがに洋風モダーンの明朗快活なる所あり、一見して夫々各地の人種と、顏貌と、風俗習慣等が識別せられる。しかもそれらの種々の異りにも拘らず、全く我が同胞としての深き〳〵親愛なる情が感ぜられるのは何故であらうか。あゝこれひとしく佛陀の愛子として、一大精神的血液が通つてゐる爲であらう……。

九時四十分、滿場着席と共に、司令者によつて開會は宣言せられた。この日、この歷史的國際佛教大會議の實況は、ラヂオを通じて全國に放送されるのである。全聯主事好村春輝氏、開會を宣するや、先づ一同總起立して、莊嚴なる君ケ代の奏樂裡に、我が大日本佛教青年會の會旗たる赤地の五大洲に綠の菩提樹の葉を描き、その左上方に明星を一つ輝かした、佛陀成道時の風光を象徵したる會旗は正面所定の高き壇上に奉置せられた。滿場の拍手しばしは鳴りも止まない。續いて印度、セイロン、カナダ等の代表が夫々會旗を奉じて安置したが、この時聞えた奏樂は何であらう、實に『ゴッド、セーヴザ、キング』といふ英國國歌であつた、あゝ不調和も甚しい、佛陀の生れたまひし印度の國、その印度が今や英國の壓制治下に苦しみ、祖國獨立の運動が行はれつゝある今日、圖らずもこの一大歷史的國際佛教會議に於ける印度の國歌は英國のそれであつた我等は思はずはふり落つる熱涙をとゞめ得なかつた彼の印度代表の――おゝ佛陀釋尊の血潮を受け嗣ぎし――佛教の由來國たる印度代表の、靜々と會旗を奉置するを目擊しつゝ――彼等の祖國を、彼等祖國の民を思つて、予は咽び泣いた……否、參列者の誰しもが皆この感であつたといふ……。

續いてシャム、ビルマ、中華、滿洲、ハワイ、アメリカ等各國の會旗が各々その國歌奏樂裡に奉置せられ終るや、佛教音樂協會聖歌隊の女學生によつて莊嚴なる讃佛歌が唱へられた。

一、三千とせの遠きむかしに
　　萬世ののちの後まで
　かゞやかすひかりめぐみし
　　ほとけはやほとけたふとし
　あなほとけ

二、ならびなくふかきなさけに
　　もろ〳〵のなやみかさねて
　あきらけきまこと啓きし
　　ほとけはやほとけかしこし
　あなほとけ

三、あめつちにかゞりありとも
　　常住のすがたのまゝを
　ゆるぎなき力どさとす
　　ほとけはやほとけはてなし
　あなほとけ

四、うつそ身のわれらもろびと
　　まよへばぞやみちに暮るゝ
　一すぢにみのりによらん
　　ほとけはやほとけたのもし
　あなほとけ

壯重の氣滿場に流るゝ時、印度大菩提會主事デバプリヤ・ヴァリシンハ氏は靜かに登壇して、導師となり、パーリ語の三歸依文を唱へるや、大衆總起立してこれに唱和した。あゝこれ佛陀世尊がそのかみ金唇を綻ばしたまひしそのさながらの音聲であらうか。

ブッダム　サラナム　ガッチャーミー
ダンマム　サラナム　ガッチャーミー
サンガム　サラナム　ガッチャーミー

靜肅にして森然たるその音調……あゝ我等の身心は淨化し靈化せられて遙かに三千年の古に至る……

この意は即ち華嚴經に有名なる左の偈文である。

自ら佛に歸依したてまつる、當に願はくは衆生と
ともに、大道を體解して無上意を發さん
自ら法に歸依したてまつる、當に願はくは衆生と
ともに、深く經藏に入て智慧海の如くならん
自ら僧に歸依したてまつる、當に願はくは衆生と
ともに、大衆を統理して一切無礙ならん

續いて英語の佛教聖歌あり、更に聖典拜讀として漢譯の般若經が讀誦せられた。而て壯快なる佛教青年會歌を以て開會式の第一部を結んだのである。

曉の鐘は高鳴り　朝日子の光かゞやく
萬象の綠もへたち　無憂華の匂たゞよふ
天地の命は永く　金剛の力漲る
いざ吾等　共に目ざめん人の世の朝
いざ吾等　共に勵まん人の世の春

いざ吾等　共に進まん御佛の跡

開會式第二部に、十時二十分より始まり、まづ總裁に大谷尊由氏、會長に柴田一能氏、副會長に、日本、滿洲、シャム、アメリカ等の代表數氏、顧問に日本佛教界の耆宿數氏を推戴し、次いで會長及び總裁の式辭あり、日本語にて讀まるゝや、英語及び支那語に飜譯せられた。（この後すべてこの方式で進むのである）續いて各國代表のメッセーヂ朗讀あり、來賓祝辭として、先づ松田文相、つづいて外相代理重光次官、香坂東京府知事、牛塚東京市長、其の他の祝辭あり祝電披露あり、更に議長、副議長の選擧ありて前者に大村桂巖氏、後者にパリシンハ氏等を推し、各々その挨拶あり、かくて佛教聖歌『四弘誓願』あつて、正午第二部は終り、こゝに佛教會議第一日の序幕は閉ぢたのである。

一同會場を出づるやそぼ降る雨中に記念撮影し晝食を終つた。

午後、各國首席代表は宮城に伺候して、天機を奉伺し、更に首相官邸に於て外國代表歡迎茶話會あり夜は朝日講堂に於て記念大講演會が催された。定刻七時、會場は既に滿員である。三澤智雄氏開會の下に、

大亞親善と佛教　中華代表　阮紫陽
佛教國印度　印度代表　デバプリア・ヴァリシンハ
佛教は安樂の法門なり　滿洲代表　如光法師
第二回汎太平洋佛青大會に出席して　ビルマ代表　ニョウ夫人
佛教をヨーロッパへ　佛教エスペラント語代表　エッケルマン
シャムに於ける佛教の普及に就て　シャム代表　ピア・バンチョン
ハワイの佛教　ハワイ代表　大塚　與
日米を結合する佛教　アメリカ代表　ウイリアム、マジストレチ

佛教徒に告ぐ

印度教徒代表　ヴイシュバ・バント
國際佛教と國民佛教　日本代表　矢吹慶輝

いづれも夫々感銘を受けぬはなく、殊に國際親善の雰圍氣和かに終始したが、予はこの中、印度代表ヴァリシンハ氏の靜かにして力ある辯と、矢吹博士の講演とは深く同感する所であつた。夫々の內容をこの紙上に傳へ得ないのは遺憾に堪へぬ。

こゝに大會の日程を掲げやう。

第二回汎太平洋佛教青年會大會順序

東京の部

七月十七日（火）　午後三時―九時　各國代表歡迎會　全日本佛教青年會聯盟　於日比谷公會堂

大會

七月十八日（水）　第一日　於築地本願寺

大會參加者登球　午前八時—九時

(A) 開會式　司會者

第一部　午前九時十分—十時二十分

一、入場(奏樂)　帝國女子管絃樂團指揮　弘田龍太郎

二、開會宣言　各國代表(ABC順)　來賓

三、參加國々歌　午前九時四十分　司會者

四、佛教聖歌「讃佛」　各國佛教青年會々旗奉戴佛教音樂協會聖歌隊

五、三歸依文(パーリ語)

六、佛教聖歌(英語)　(四七番)We Clothe Our selves

七、聖典拜讀(漢文)

八、佛教青年會歌(日本語)　會衆一同

第二部　午前十時二十分—正午

一、開會の辭　司會者　二、假議長着席

三、總裁、會長、副會長、顧問推戴

四、會長式辭(英譯、支那譯)　五、總裁挨拶

六、各國代表メッセーチ朗讀　七、來賓祝辭

八、祝電、祝辭披露　九、議長、副議長選擧

十、議長、副議長挨拶　十一、佛教聖歌「四弘誓願」佛教音樂協會聖歌隊

十二、閉會　司會者

(B) 記念撮影　晝食　正午

(C) 各國首席代表宮城伺候　午後一時

(D) 外務省招待會　外國代表歡迎茶話會　午後三時

(E) 大會記念大講演會　朝日講堂　午後七時

七月十九日(木)　第二日　於　築地本願寺

(A) 總會　(午前八時—午前十時)

一、開會　二、三歸依文(巴利語)

三、議長着席　四、會議役員選擧

五、第二回汎太平洋佛教青年會大會準備經過報告

六、議案上程　七、議案審査

八、各國佛教青年會現狀報告　各國代表

九、議案審査報告　議案審査委員長

十、議事

十一、閉會　午前十時

(B) 部會　午前十時—正午

一、開會　午前十時　二、部長着席

三、議事　四、閉會　正午

(C) 各國大公使の自國代表招待歡迎會　午後三時

七月二十日(金)　第三日　於　築地本願寺

(A) 總會　(午前八時—午前九時)

一、開會　午前八時　二、三歸依文(巴利語)

三、報告　四、議事

五、閉會　午前九時

(B) 部會　(午前九時—正午)

一、開會　二、部長着席

三、議事　四、閉會　正午

(C) 東京市長招待歡迎會

(D) 講演會外國代表　午後六時半　帝大佛教青年會館

七月二十一日(土)　第四日　於　築地本願寺

(A) 總會　(午前八時—正午)

一、開會　午前八時

二、聖歌(英語)　(六二番)Sweet Hour of Meditation

三、三歸依文(巴利語)　四、議長着席

五、各部會報告　六、議事

七、聖歌「四恩の歌、佛教徒の歌」佛教音樂協會聖歌隊

八、閉會　九、萬歲三唱(總裁發聲)

(B) 午餐會　正午　於　築地本願寺

(C) 文部大臣の外國代表招待歡迎會　午後三時

京都へ出發　午後五時　東京驛乘車口集合

午後五時五分　東京驛發(特別列車)

閉會式　順序(京都　岡崎公會堂)

入場(奏樂)

一、開會の辭　二、君代

三、三歸依文　四、總會經過報告

五、宣言文朗讀　六、總裁式辭

七、來賓祝辭　八、祝電披露

九、代表者挨拶　十、副會長謝辭

十一、各國佛教青年會旗降納

十二、佛教青年會歌　十三、閉會の辭

十四、萬歲

退場(奏樂)

大會第二日(七月十九日)は、同じく八時より總會は開かれ、先づ印度の長老シュリ　ジナワンサスワミ法親王、導師となつてパーリ語の三歸依文唱和あり、會議役員選擧、好村主事による大會準備經過報告あり、次いで百二十七題に亘る議案は上程せらるゝと同時に、審査委員に付せられて、總會案及

び四つの部會案に分類せられ、この間に、各國佛教青年會の現狀報告あり、最後に各國代表は夫々日本に贈をなし、大谷總裁これを受理して篤く感謝の意を述べた。就中、印度代表の齎せし菩提樹の若木、シャム代表の將來せる、シャム字の三藏經典、大藏經典結集略史、佛教傳來略史、佛像七種、貝多羅葉の長阿含の一部、八正道講義等々、得易からざる貴重の品を贈られたのには感激の外なく、嵐の如き拍手を以て之を感謝し、夫々の説明を聞いたのであつた。

さて、總會は終り、十時よりいよ〳〵部會となつた。こゝに先づ部會の組織と内容とを概説しよう。

組織、本大會を總會と部會とに分つ。

第一部會　主として佛教の本質的問題を取扱ふ、（例へば、佛教の本尊、佛教精神、佛教徒の資格等）

第二部會　主として佛青の對内的問題を取扱ふ、（例へば、組織制度、指導精神、幹部養成及び連絡等）

第三部會　主として佛青の對外的問題を取扱ふ、（日曜學校、講演會、音樂會、社會事業等）

第四部會　主として社會問題及び思想問題を取扱ふ（社會不安、戰爭、共產主義、ファッシズム等）

さて予はこの四つの部會の何れにも出席して發言致したき事が數々ある。實に身體が四つあつて欲しかつた。然し如何せん、一つの部會に臨めば到底他に出席するの餘裕がない。予は深謀熟慮した。第二及び第四部會にも特に出たい。佛教の社會指導の原理、並びに世界平和案、人類平等案等、まことにセンセーショナルの問題である。然しながら人類平和の問題は、佛教の理想として固より大いに世界に叫ぶべきものではあるが、今日國際間の現狀は遺憾ながら、政治的、經濟的、軍備的等々、互ひに危機を孕んでゐるのであつて、吾人の理想には遙かに遠く各國國情の種々なる具體的現實性によつて、人類が

等しく望んで止まざるところの、平和の理想は種々に制約されてゐるのである。しかのみならず先づアジア民族の更生と東洋平和の確立の爲には、時あつて『正義の戰爭』をなすのも亦止むを得まい。又社會的指導精神の問題も重要かつ適切ではあるが、抑も『發心解越すれば萬行徒らに施す』といふ先賢の語もある如く、佛教にして最も第一に本尊及び本質を正しうせずんば、百千の決議も効あらざるべし、尠くとも功德薄かるべし……況んや參加者の多くは殆ど、淨土及び眞宗の念佛系と、禪及び眞言等の信徒にして、我が純乎佛教信仰の正統たる日蓮門下は寥々として曉天の星の如くなるに於てをや、佛教の第一義たる本尊を正境として確立せんとするの大事は、やゝもすれば覆へされんとするの危機にあり、此に於て、予は決然　佛教の大義名分に順つて、佛教の本尊並びに本質を論斷審議決定すべき第一部會に出馬したのである。

部會長は、智山大學教授にして、先にラヂオによりて般若心經を講じ、名聲嘖々たる高神覺昇氏である。議案は第三十七條より始まり、第三十九條「佛教の本質を明確にし、且之を普及せしむる途を講ずるの件」に就き　提案者たる早稻田大學佛教青年會の榊原歸逸君これが説明を試みた。予は直ちに同君に佛教の本質に關する腹案ありや否やを尋ねた、同君は持合せないといふ。こゝに於て予を始め論客交々起つて、佛教の本質に關する議論に盛に華を咲かすに至つた。而もこは必然に佛身觀の問題が出で來つた。否むしろ予等が之を誘導したのかも知れぬ。八高教授椎尾詞君は、人間釋迦と佛陀とは異るといふ如き珍論を吐く、同君の得意とする所は緣起論的思想、無我、空の思想らしい。予は佛身觀に就ては最も得意の境場であり、又かゝる緣起論及び實相論といふ如き佛教哲理に就ては衷心腕の鳴るを禁じ得ない。予は眞向より起つて、椎尾氏の思想を論駁し、

歴史上の佛陀人間釋尊と教理的本佛との相即一體なる、現身即法身、本佛實在とその應現作用なる、日蓮教學の根幹を概說した。椎尾君曰く『河合氏の如き自信あり確信ある辯論と態度には私も讃成致します』と。つゞいてアメリカ代表の井上盡奥氏は、佛教の本質は涅槃にありとて、かなり管々しき說明を陳ぶ。立正大學の渡邊慈顯君は、佛教の理想は、成佛と淨佛國土にありといふ。その他數氏交々起ち、就中椎尾氏と予とは最も論戰應酬これ努めた。所定の時間は於に超過してゐる。『佛教の本質などといふ事に就て論議してゐては、今日、日が暮れても明日になつても盡きないから、知名の學者に附托して決定してもらつては如何』といふ案が出たが、實に不見識も甚しい。學者が百千人寄り集つても甲乙丙丁決定し難きは、この部會と同樣であり、且いはゆる學者と、我等不動信の純潔熱誠なる求道者と、必ずしも敢て隔りあるものでない。高神部長も之には反對であり、それでは議案審議といふ形式をやめ討論會といふ自由形式にして大いに論戰すべしといふ事となり、一先づ部會を閉ぢて晝飯となり、一時半より再會した。

椎尾氏は佛教の本質に關し、衆緣和合と空の思想をプロフェッサー振つて講論し、因果律を否定し、個人主義を破るや、予は直ちに起つて、衆緣和合—因緣空、無我の思想を一たび認容はしつゝも、この思想を、まづ天臺の法華玄義等に於ける藏通別圓四教の見地より批判して、『通眞含中』『大乘の初門なり』と論じ、進んで純圓一實、法華の實相觀に達すべきを說き、大乘涅槃の常樂我淨、佛性有我の說本覺の佛陀の儼存、眞空妙有、事の一念三千これ緣起論系の完成たると同時に實相論系の究極にして、佛身觀と涅槃論との根本的統一なり、これ無上菩提論にしてまた法界觀の極致たり。殊に哲理的根柢よりするも、はたまた道德的要求よりするも、自我の

實在、意志の自由、人間の靈性、人格の權威、その無限なる創造性と尊嚴性をどうして否定することができようぞ。無緣和合なりとて、吾人の道德的責任を無限の彼方に解消せんとするが如きは、斷じて予の取らざる所なり。因果の法律は法界人生色心を一貫する嚴肅なる眞理なり。不滅の個的生命は、因果の理法——否——作用によつて三世に連續發展するものにして、更に倫理的因果の根柢には生命の實在不滅に關する『本有』の論理的因果あり。因果律を確信することによつて、——予は却つて椎尾氏の七首を取つて彼に擬する——惡しき意味の個人主義的墮落を防ぎ、社會性と懸隔せざる眞實の人格完成的個人主義を、健全に發達せしむることを得るのである』と。

かくて、二三氏亦起つて聊か論じたが、規定の時間は既に終つたので、二時半より部長指命の下に委員會を開きて、佛教の本質を審議することになつた。委員は、中村、井上、椎尾、行縄の四社會人、渡邊、榊原の二學生と、及び予の七人である。部長と共に種々審議の結果、

佛教は涅槃(さとり)を理想として菩薩道の實踐を期するを以てその本質とす。

といふ決議を定めて、三時半やうやく散會した。此日予は最も椎尾氏と一騎討ちを演じたのである。知らず、勝敗の數は何人か知るや……を。

この夜、銀座の明治製菓に於て、學生中心の懇親會開かれ、予も京大出身として出席した。予の母校の學生を始め、立正、駒澤、大正、龍谷、大谷、高野山等の各大學、及び四高の一學生等、數十名歡を盡しすこぶる盛會であつた。多くの學生諸君と知り得て種々熱辯を揮ひしは實に愉快であつた。

大會第三日(七月二十日)八時より九時の總會は豫定の如く進行した。九時より部會は開かる。まづ慶應佛青提出の

第五十八條　各國佛青は一般民衆に深く浸潤せる寺院佛教思想の蒙を啓き、青年を對象とせる新佛教教化運動に努力すること

に關して、野崎久雄君の説明あり。予　は乃ち起つて、『現在寺院僧侶の頽廢は何人も殆ど否定し得ざるべし、されど覺醒せる僧侶も固より又之有り。今や佛教復興の氣運に當り、我等純潔にして熱と力ある青年學徒は、大聲吒呼佛陀正法の弘通に盡瘁し、在家又は一般信徒よりして、却つて僧侶沙門に佛教的使命を逆輸入して自覺せしむべし。さりながら、佛教は寺院僧侶のものに非ず、責任の一半は信徒の心掛に在り、理想とする所は、僧俗共に協力して佛法の宣揚に精勵すべきなり』と陳ぶ。

之に關して、井上氏、牧野氏、中村氏、北米代表の一青年及び一婦人等交々立つて論駁應戰、種々に議論沸騰したるも、遂に議案を修正して、

各國佛青は青年を對象とせる佛教教化運動に努力すること

と可決した。

つゝいてセイロン代表提出の

第百二十五條、バーリ三藏經を日本語に飜譯すること、並にパーリ三藏科を日本各大學の文學部或は哲學部内に設置することを提議す

に就き、遠路はる〳〵黒潮を越へて來れるニッサンカ氏の説明あり、一語々々雄辯にしき力强きその熱辯は、滿場の拍手を受けつゝこゝに國際會議の光景と交驩とを味つたのであつた。

時は既に豫定の正午を過ぎだが、予は時を移さず一大重要議案の審議を要請し、高神部長これを容れて、即ち

第四十七條　本會に於ける本尊佛の確定及び禮拜形式統一に關する件

早大佛青の榊原君、これが提案理由を説明するや、予は間髪を容れず『議長！』と呼んで立ち、多年鬱積し來りし素懷を寸分の休みもなく論じ續けた。

抑も佛教の本尊を大聖釋迦牟尼如來に決定すべきは佛教第一義の先決問題にして、一切の信仰、修行、思想、學問、皆こゝに由來し又こゝに統歸せらるゝのでありますが、その理由は大いに在るあり。

一に、先づ歸依三寶の綱格より見るも、由來佛教の他宗に異る、即ち佛教の信仰修行の標幟たり佛徒の名分たるこの歸依三寶は、歸依佛、歸依法、歸依僧の順序にあり、昨日も佛教本質論に關し、佛教の中心は佛陀なりや法なりや、との議論出で、佛陀は法を覺りて佛となりしもの故、法が根本なりとの説もありましたが、法はいはゆる『有佛無佛性　相常然』にして、佛まづ説かずんば、法は現れざるなり。即ち『佛陀』は智慧解脱最勝にして而もこの解脱の果とその因とを説き示し給ひ、又その解脱の境界は無上の妙覺にして、煩惱寂靜の地なることを教へ給ひ、また佛陀は生死苦惱の大海を竭し、いはゆる變易の生死すら渡り給ふと申して、智慧の上に一點の誤謬すら殘し給はず、また身口意の三業は寂靜に歸し給うてをります。

（法華本門なる佛教極致の妙教より見れば、この三業は三輪の妙化として、無始盡十方に常恒の大化益を與し給うてゐるのであります。歸依三寶―歸依佛寶もやがては必ずやこゝに至らねばなりませぬ）

法とは生死の大苦聚を解脱し、四顚倒見を離れたる大法である。（法華本門の妙教より見れば、倒見を離れて、眞の常樂我淨の四德波羅密に攝成せられたる大法であります。）

僧とは心寂靜にして、心に僻惡多く、少欲にして足ることを知り如法にして住し、正道を修して正解脱を得、得已つて復能く他の爲に轉教し傳道する聖者であります。優婆塞戒經淨三歸品に云く

一切諸佛は法に歸依すと雖も、法は佛說に由るが故に顯現することを得たり、是の故に應當に先づ佛に歸依し上るべし。淨き身口意をもて至心に佛を念じ、念じ已つて即ち怖畏恐惱を離る、是の故に應當に先づ佛に歸依し上るべし。

智者深く觀ぜよ、如來は智慧解脫最勝にして、能く解脫及び解脫の因を說き、能く無上寂靜の處を說き、能く生死苦惱の大海を竭し、威儀詳序三業寂靜なり、是の故に應當に先づ佛に歸依し上るべし。

智者深く觀ぜよ、生死の法は是れ大苦聚なり、無上の正道能く永く之を斷つ、生死の法は渴愛饑饉なり、無上の甘露味能く充足す、生死の法は怖畏險難なり、無上の正法能く之を除斷す、生死錯謬邪僻不正にして、無常を常と見、無我を我と見、無樂を樂と見、不淨を淨と見る、無上の正法悉く能く除斷す、是の因緣を以て正に法に歸依し上るべし。

智者將に觀ずべし、佛僧は寂靜にして心に憐愍多く少欲にして足ることを知り、如法にして住し、正道を修し、正解脫を得、得已つて復能く轉じて人の爲に說く、是の故に應當に次ぎに僧に歸依し上るべし。

若し能く是の如き三寶を禮拜して、來迎去送尊重讚歎し、如法にして住し、之を信じて疑はずんば是を則ち名けて三寶を供養すと爲す。全文まことに明瞭であります。誰か之を疑ひませうぞ。

元來宇宙人生を大觀すれば、吾人現實の存在界は迷妄にして、之に對する理想の世界として意味又は價値の世界あり、いはゆる規範の世界であります。然るに佛陀はこの規範的價値を既に體現實證せられるものにして、この意味に於て我等に對すればまさしく高次的實在者である。理想が現實と成り居る

所の、いはゆる價値と實在との統一を、しかも一大人格に顯現したまへるものにして、これが形而上界に於ける眞實在者なり。非人格的なる『法』とはかゝる人格的高次の實在界と我等が如き低次の實世界との中間にあるものである。我等は法に歸依するも、更に今一般測つて、その最高具象的實在者たる佛陀に歸依せざるべからず。更に徹底して言はゞ『法』といふもその最も具體的なるものは『人格』にして、即ちいはゆる法性眞如が心情を有しゐるものを指す、この最高實在が即ち佛陀の法性身なり眞如身なり。而して佛陀とは何ぞや、論ずるまでもなく大聖釋尊なり。佛敎に於て佛陀と言はゞ、大覺世尊釋迦牟尼佛を指すことあだかも天日を指すが如くに明々白々なる大事實であります。

更に論を進めて言はゞかのいはゆる法が久遠の法なる時、人たる佛陀は依然として三千年前史上の新佛たるにとゞまるか、といふに、曰く否、この同の妙旨を開顯せしものが、即ち法華經に於ける方便品の、三世諸佛の『一乘開顯』より、進んで如來壽量品に於ける、その三世諸佛の根本的本覺體たる『本佛開顯』にあり而もこの本佛を現實の師主たり慈父たる我が釋尊に見出す所に、佛敎の玄々微妙なる一大哲學あり、一大宗敎思想あり、一大信仰は存するのであります。法が久遠の法なる時、佛は久遠の佛となる。これ無始以來の法界の實相なり。三世諸佛と久遠本佛とは地位異り。前者は法に順ひ、後者は無始より本法と冥合す。後者は前者の最高なる綜合統一的根源的實在者なり。本佛　本法　不二一如にして、しかも尙ほ　本佛一大絕對人格の中に、本法を包攝するのであります。本佛の人格とは、久遠の法　プラス　アルファーにして、こゝに無限なるいはゆる人格の人格たる含蓄あり、創造性あり意志性あり、神秘性あり。その法華經涅槃經等に於ける經證は今は之を省略し、佛敎の大小乘を一貫

するの通規として、佛教の本尊は巍然として歸依佛釋尊に存することを、有名なる勝鬘經を引いて之を證明し、以て予が一家の見に非るの神聖なる教權と致します。

勝鬘師子吼經一乘章第五に云く、

無盡の歸依、常住の歸依となる者とは謂く、如來應等正覺なり。法とは即ち是れ說一乘道なり。僧とは是れ三乘の衆なり。此の二歸依は究竟の歸依にあらず、少分の歸依と名く。何を以ての故に、說一乘道の法は究竟の法身を得れば、上に於て更に說一乘の法身なし。第一義に歸依するとは、これ如來に歸依するなり。(法、僧の)この二も第一義に歸依するなれば、是れ究竟すれば如來に歸依するなり。何を以ての故に、如來を異することなく、二歸依を異することなければ、如來は即三歸依なり。

第二に、佛身觀の教理より見るも、現身の釋尊涅槃の後、その不滅の本體たる法身を求めて、欝然たる教理の發展を促し、折空、體空等の空觀、影現の假觀、但中及び不但中等、抽象的或は具象的、中道實在の思想、理圓、事圓、又その雜、純等、之を概括すれば、空假中の三觀、藏通別圓四教六種の法身觀、總じては『法報應』の三身觀となりしも、その究極は、無終無始なる法身の實在者に常住不斷の眞人格を認め、以て報身を之に攝し、更に百尺竿頭一歩を進めて、この人格的法身の應現として釋尊の出現成道をこゝに包攝し、こは即ち又ひるがへつて考へれば、現實的應身の釋尊に絕對的人格法身の本佛を見るものであつて、始覺即本覺、事實即本體、本體即作用、歷史的佛陀即教理的久遠の本佛なり。三身相即しかも無始久遠の統一的佛身なり。こゝに佛教絕對の本尊として、即ち一大法界の久遠根本中心として、主師親三德有緣の大恩教主活ける人格實在本佛釋尊の信仰は成立ち、慈悲も智慧も眞理も善根も功德も神通力も人格の壽命も光明も、一切の佛力こゝより發しこゝに收まる。これ法界の靈源たり、信行、法行、二者ともに遍ゝ佛教實踐の淵源たり趨歸たり、以て全佛教の統一はこの佛身觀の根柢よりして成立するに至つたのであります。

かの歷史上の人間釋尊と、教理的佛陀とは異るといふ如き、椎尾氏流の論は、佛教の哲學的根柢よりして、不備不徹底不融未究竟なる『別教隔歷』の粗見であります。

第三に、佛教の教理を三大分して、佛陀への信仰を大觀するに、まづ小乘阿含の教にては、過去に七佛未來に彌勒を說くも、現在は我れ釋迦牟尼によつて汝等は救はるべきなりとて時間の中心を示し、次に方等、般若、華嚴等の權大乘にては、東西十方に佛と佛國土を說くも、今此の娑婆世界は我れ釋迦牟尼の濟度因緣の地なり、汝等皆我れに依つて救はれんと空間の中心を示し、進んで實大乘法華本門の大教に來つては、この二種の有限相對的時空中心論を無限絕對化し、一時的化緣論を本質論上より解決して三世盡十方、無始無終無邊無際、全法界を盡して一大本佛釋尊の一大化境なり、釋尊は久遠本果の佛、娑婆は久遠本國土の境界、我等は久遠本眷屬の愛子こゝに久遠劫來、本感應あり本說法あり、本神通功德利益あり、こゝに始めて全き佛教の根本的統一は成立ち、又實にこゝに始めて佛教の大義名分は嚴然として確立し擁護せらるゝを得るのであります。

第四に、佛教の大藏經を閱覽するに、まづその分類を、佛教史上の一大偉人たる天臺大師にとり、諸宗共許なる五時判に見るに、まづ華嚴部の經典は皆、釋尊大覺の內容として、盧舍那報身の廣大なる境界を說きしものであつて、即ち成道の釋尊の大心地界を讃美せるものに非ざるはない。次に阿含の佛典は、徹頭徹尾、我が現實の主たり師父たる嚴かにして懷かしき釋迦牟尼世尊に渴仰恭敬を捧げたるものに、般若は空を說くと雖も、また如來の身實相と妙

智とを説いて、思想の歸結を佛身の信仰に結ばしめあり。法華は釋尊を開迹顯本して、その無始無終なる法界遍滿の悠久性、偉大性、絶對性、尊嚴性、同化性を説きたるものなれば、絶對的釋尊本尊論なることは今更いふまでもなし。涅槃經は是れ法華經註釋なり、世尊の大圓寂に臨んで佛弟子達が、衷心赤誠を傾け盡して佛恩の廣大無邊なるを感謝し讃美し奉りたるものなり。たゞ方等部の一角に、僅かに彌陀、大日、藥師等の佛名あるも、これ固より一時的方便の權説のみ。やがて法華に來つてひとしく開廢せらるべきものたること、その教相より見るも又その所説の内容上の問題よりするも、夙に明かなる所なり。況んや佛陀信仰の統一が、巍然として大聖釋尊に存すること、如上の種々なる理由によりて既に明かなるに於てをや。かくて一切經を通覽するもその歸結は翕然として我が釋迦牟尼佛の信仰に收まるを見るのであります。

第五に、佛滅後信仰の變遷發達を大觀するに、世尊の入涅槃に際して遺弟等はうたゝ悲涙禁ぜず、切切たる戀佛愛法の情は、或は在世追慕の信仰となり或は佛舍利の信仰となり、或は佛像崇拜となり、或は經典崇拜となり、その不滅の本身を求めて法身實在の信仰となり、こゝに法性眞如の觀念觀法となりましたが、更に一轉して温かなる人格の佛を求めて彌陀、大日、藥師等、他佛他菩薩の信仰に向ふに至つたのである。しかしながら由來釋尊の不滅の御身を尋ね來りし佛教徒が他佛他菩薩に向ふが如きはこれ佛陀信仰の正道を逸脱してゐる、佛教の大義名分を蹂躙せるものである。況んや又その思想教學も不備不融にして到底十全たり得ない。かゝる時に當つて、釋尊實在不滅の信仰は起り來つた、即ち前來種々なる信仰系及び觀念系の思想を統一して之を釋尊の根本に還し、加之、この釋尊即久遠常住實在の本佛なり、釋尊即不滅の如來なり、無始以來法界の法王なり、我等の慈父なり、本等の本師なり。信仰系の究極としては釋尊即本佛即ち無始以來主師親三德の大恩德者にして、本佛三輪の妙化あるを明し觀念系の究極としては、無始三身即一の應身常住にして佛界緣起の圓慈觀なるを説き、しかもこの二系統は一箇――『本佛信仰』に於て本有の統一　無作の調和を成就し、立正觀即一大信仰となりて、本佛の大慈悲と我等の佛性と――信智一如、慈信一體感應道交不斷につらなり、自力他力合力の信行、廣大無邊の佛力を加被せられて、佛教唯一の正系易行道こゝにあり、亦即是れ菩薩の六波羅密を蘊在した最勝道なり、以て靈山淨土への往生――寂光の境界の成佛を期す、眞に一實道の『顯本的念佛』とは『念本佛釋尊』に在り！

こゝにかの在世追慕以來佛教史上のあらゆる思想研究と信仰情操は統一せられ、永遠に新たなる感激を以て、苟くも佛教のあらん限り、苟くも佛陀の明教が人類の靈奥に脈々たる鼓動を續けゆかむ限り、その信仰の靈源――その感應救護の中心は、佛教の本尊即法界の本尊たる一大本佛釋迦牟尼如來に存するものなることを、今や明かに我等淳善の佛子は信受し奉ることを得るに至つたのであります。

見よ、印度にても、西域にても、支那にても、シヤムにても、ビルマにても、世界の佛教各國、その本尊と仰ぐ所は皆ひとしく釋迦牟尼佛であります。そは彼の地の靈蹟を參拜する者のひとしく叫ぶ所であります。日本ひとり信仰の本尊に幾多の分裂を呈するも、これまた一時の現象のみであらう。苟くも佛教の統一を叫ばん者は、先づ第一に、釋尊のおん名に於て集るべきであります。而てその釋尊崇拜の意義を徹頭徹尾根本到頭、終始一貫して尋ね極め、そこに信仰最後の安住地を見出すべきであります。

たゞ今日は遺憾ながら、釋尊に對する信仰意識は各宗區々であります。願はくは將來必ずや不肖の

陳べたるが如き一大信仰に統一せらるゝの日あらむ事を。而て本大會及び本聯盟も、今日より毅然として本尊佛を釋尊として信仰禮拜致したいものであります。否たゞに一日だけではなく、一年三百六十五日、本大會を中心として、世界の人類がこの　本尊釋迦牟尼世尊のもとに集ひ來たるやうに致したいものであります。あゝ私は人類文明の將來に多大の望を囑するものであります。』

予は是の如くに陳べた。滿場寂として聲がない。時間も既に超過せることである故、しば〳〵戸田副部會長より『簡單に』『簡單に』と注意せられたが、予は言はんとする所は之を陳べた。熱火の辯を揮つた。口角飛び出づる泡が卓上に落つるを自ら知つてゐた、徹底的戰鬪精神を以て正々堂々と論達した。

『如何なる論敵も、この正法正義の前には一歩も許さぬぞ、如何なる方面からでも突いて來い、寸分の隙も見せぬぞ、如何に念佛信者　禪　眞言門等が大多數なりとも、この佛教最第一の正義の前には――然り　我が佛教の大義名分の前には一歩も讓らぬぞ一歩も退かぬぞ　佛教の正義！我は必勝を期せずんば止まず！』予の心中は正しく是の如きものであつた。

何人も矢表に立つ者がない。

高神部長はおもむろに發言した『誰か異議はありませんか』何人も答へる者がない。

部長は再び、靜かに然し力强く宣言した。

『諸君一同の讃成により、第四十七條、本會の本尊佛を釋尊に決定致します』

部會はかくして通過したのである。

禮拜形式統一の件は、昨日の通り、予等を始め七委員へ附托となつた。こゝに始めて空き腹に辨當を詰め込んだ。時に一時頃。

戸田副部會長は言つた『河合さんの議論は、反對者が出た時に陳べればよい』

予は即座に答へた、『いや、私は東郷元帥の丁字戰法を取つたのである。一歩も敵に乘ずる隙を與へず眞先きに敵の頭を制壓したのであります。』予意氣軒昂たり。

大會の囑托として速記をとりし貴族院の枝手月江氏は、予の所に來つて曰く、

『只今の御演說は、とう〳〵速記がとれませんでした。甚だ相濟みませんが、四五日の中いつでもよろしいから、今のお話の原稿をお書き下さつて渡して下さいませんか、大會から速記の委任を受けてゐますから』と。そこで予は、できる事ならば大會審議の東京に於ける最後たる明日までに之を仕上げたいと思ひ明朝を約した。連日殆ど睡眠は二三時間である。更に今日は徹夜しても書き上げようと決心した隨分身體には無理であるが……

午後二時前、部會は再會された。本會の禮拜形式は既に實行せる如く、三寶禮と決定した。つゞいて佛青運動と宗派的關係等の問題あつたが、これは審議未了とし、つゞいて、佛青年中行事に、二月十五日の涅槃會と、盂蘭盆會を加ふること、また內容豐富なる讃佛歌集を創作すること、更に映畫其他に於て佛教の尊嚴を毀損せざること等に關する具體案を協議し、既に第一部會の重大問題は片附きたれば、一瀉千里殘りの議案を悉く審議して、やうやく三時頃この部會を終了したのである。大會中、最も長く頑張つた部會はまさしくこれであつた。

この日は夜、帝大佛教青年會館に於て各國代表の學術的講演會があり、予はぜひ之を聞きたかつたが、先に速記者より賴まれた原稿の事があり、併もこの方が更に重大事なるを思つた爲、殘念ながら聽講をやめ、歸來少憩の後、連日の疲勞を押し切つて書き始めたのである。

大會第四日（七月二十一日）此日予は夜中三時頃より起き出でゝ更に原稿を書きつゞけ、荊妻にもその

一部を手傳はせ、漸く大體が出來上るや、急ぎ會場に驅けつけ、八時よりの開會、三歸依文唱和に間に合つたのである。三寶禮はさすがに宗教的深味を覺ゆる行事であつて、予は一日も之を缺かざらんことを努めたのである。而も今日は開會以來種々の議事進行中、予は座席にあつてこれを聞きながら尙しきりにペンを走らせ、一時間を經て漸くこの原稿は出來上り、約束の如く來り待てる速記者に手渡したのである。

さていよ〳〵會議最後の日として總會のみなる今日に於て、先づ注目すべき議事は、從來佛教宣布に當つての功勞者表彰に關する件と、更にかねしより要望され居りし『汎太平洋佛教青年聯盟』がいよいよこゝに結成されることゝなり、委員に依つてその規約が作られ、その本部を我が日本に置くことゝなつたのである。これやがて全世界佛教青年乃至は佛教徒聯盟への序幕であるのである。

續いて先づ婦人部會決議事項が報告し可決せられ次に第四部會の決議が上提せられた。それは世界平和、人種平等、軍備問題、社會政策等に關する種々の國內及び國際的諸問題に關して、數々の決議及びメッセーヂが朗讀及び說明せられたのである。之皆世界の現實に對する佛教の理想を揭げしものである予は『現代世界人が最も與り聞かんと欲する戰爭の問題に關して、宗教殊に佛教の之に對する態度を、本會に於て更に具體的に表明せよ』と陳べたが、時間なき爲部會決議のメッセーヂのまゝ通過することゝなつた。

次に第一部會の決議が報告上提せられた。

戶田副部會長の報告は明朗である。一通りの說明がすむと、果然カナダ代表は立つた。

『第一部會決議の他の總てに異議はありませんが、本會に於ける本尊佛確定の件に就ては、甚だ重大問題であるから、この總會に於て更めて審議し直して頂きたい』さてこそ予は言下に『議長！』と一聲力强く叫んで起ち、その許可を受けて之に答へた。予の精神は最も緊張し、一片皎々の赤心を披瀝すべく、壯重の態度と熱誠の辯を揮つた。

統一團の河合陟明であります。

佛教に於ける本尊佛の確定に就きましては、只今の質問者のお說の如く、曾に部會に於てのみ決定すべきものではなくして、本總會に於て審議すべき、誠に重大なる問題であります。さりながらこの重要議案に就ては、昨日の第一部會に於て私は佛教の本質的五大重要問題に亘つて、周匝徹底して論じ盡した所であります。今日はその速記の原稿を持つて參りましたから、その詳細は是に就て御覽下さい。然しながら此の問題に關しましては私は終始一貫、儼然として　大聖釋迦牟尼佛を佛教の本尊と決定する事を以て、佛教の最先最要の根本的重大問題なりと確信致します！　今日此の總會に於て、尙ほ意見を陳べよといふことでありますならば、概略ながらその綱領を摘んで陳べても宜しゆうございますがいかゞでありますか。

此時、佛子の至誠は無限の境につらなつてゐた。予の氣魄は滿場を呑んでゐた。昨日の部會に於ては一毫も許さゞる精悍氣鋭の白熱的戰鬪精神であつたが今日の總會に際しては、更にそれをも超越して、嚴肅壯重　至誠丹心を流露し、王者の氣象を以て議場に君臨するといふ心境であつた。是は、當時の予の僞らざる信念であり自覺であつたのである。

予は發言を終つて議長を睥睨した。

滿場は全く靜肅である。予が飽くまで『釋尊を本尊とすべきなり』と陳べゐる時、熱烈なる拍手が予の耳孕を打つたことを予は知つてゐた。予は發言を終つて尙ほ直立のまゝではあるが何人も發言する者がない。やゝあつて先の質問者が再び起ち、先の難詰的口調とは打つて變り、むしろ贊成的なるかの如き

辯を吐いたのである。

議長大村桂巖氏は、おもむろに口を開いた、『陟明君の意見に、御異議はありませんか』靜肅の詠場に再び拍手が流れた。議長は再び宣言した。

『絶對多數の贊成により、本會の本尊佛を釋尊と決定致します。』

あゝ予が此の大會に出馬するの最初より、衷心念願しつゝ微力を盡して拳々匪躬の節を致さんと覺悟し居たりし、佛教本尊佛の重大事は、遂に所願の如くに達成するを得た。

汎太平洋佛教青年會大會、それの構成分子たる我が全日本佛教青年聯盟を始め、各國の佛教青年會も、否實に今日の總會最初に結成せられ、その憲法も成立したる、汎太平洋佛教青年聯盟も、すべて今日より以後永く〳〵『佛教の本尊として釋迦牟尼佛を信仰禮拜することに成つたのである。』佛子の所願は遂き屆けられた——本佛釋尊、慈父大覺世尊の威應加被を予はひし〳〵と感ずる。予の奮鬪努力に加ふるに世尊威神力の御加被なくして、どうしてこゝに至り得やうぞ。予も力戰健鬪した。佛子の誠を盡して世尊無窮の大恩の一分に應へ奉り、又實に日蓮大士を始め代々正法正義の諸大先師、近くは恩師日生上人の、多年諄々たる慈教垂訓とその嚴乎たる遺訓に應へ奉ることを得たるは、實に佛子の本懷である。

あゝひるがへつて思ふ、日蓮聖人が一期血涙の生涯を貫いて七百年の昔より叫びつゞけ、恩師聖應院本多日生猊下が亦その畢生の主張として一世に呼號せられつゝ、しかもかの東亞佛教徒大會等のある毎に、それらが何の爲す所なきを慨嘆しつゝ『佛教徒よ釋尊に還れ』とあらゆる方面よりその正義、大義を唱道せられつゞけたりし佛教統一の一大事は、固よりその有終の美を人文遙遠の將來に囑望しつゝさあれ今僅かなりと雖もその第一階梯を踏むに至つたのである。『四月八日』世尊の降誕會を祝ひて花祭りをし、『十二月八日』世尊の成道會をも亦讃美し、更に『二月十五日』世尊の涅槃會を偲びて追慕渴仰の思に耽る……これ固より有意義なる催しである。さりながら、信仰修行の正境たる本尊の問題は、更に一層重大なる、然り佛教第一の重大事である。人類文明の將來に於て、やがては世界の人類はことごとく佛教に拜跪合掌し來たるであらう。その時——佛教の本尊は　終始一貫　嚴然として　大聖釋迦牟尼如來であらねばならぬ。　予は本大會に於けるこの第一決議が、遠く〳〵世界人文の將來を豫言し斷定し約束せむことを、堅く固く誓願する者である。　あゝ予は人類文明の將來に多大の望を囑するものである。

曾て恩師本多日生猊下は、明治二十五六年より三十年に亘つて起りし、各宗協會の四箇格言問題に對して、敢然孤軍奮鬪せられ、大谷光尊を會長とするこの各宗協會に對つて、明治三十年、京都本願寺に於て堂々所見を發表し、當時紛議久しきに及んで天下の耳目を聳動せしめ、遂に各宗協會をして瓦解するの止む無きに至らしめられたが、予は、それとは固より同一の論ではないが、予も亦微力ながら其れと相似て、帝都の築地本願寺に於て、同じく大谷尊由氏を總裁とし、大會全員、教界學界の名士の列れる、國際的佛教會議に於て、舞臺は阿彌陀佛を本尊としていとも莊嚴にまつれるその本堂に於て、予は恩師の法統を紹繼し法統を擁護する——その衣鉢を傳へし修多羅を着し、恩師愛用の念珠を手にし、愼重なる態度と至誠の辯を揮つて、『佛教の本尊を釋尊』に決定せしめたのである。四箇格言の宣揚は破邪的であつた。釋尊本尊佛の決定は顯正的積極的である。恩師の時代よりは今は甚しく時勢も異つてゐる。洋の東西を擧げて世界的に佛教復興の聲は、今や太平洋を始め諸海の波に轟いてゐるのである。

『釋尊の御名』のもとに『佛教統一』の聲は、果然『統一圓』の中より發せらるゝに至つた――大聖釋尊の――日蓮聖人の――恩師日生上人の――その佛教正脈の法統を繼げる　傳燈の弟子　我等佛子の奮闘によりて、否、本佛世尊の威神感應によるか……

佛子陟明つゝしんで佛祖の照鑒に應へたてまつる

世尊よ　南無妙法蓮華經

第一部會の報告も總會に於て遂に是の如く可決通過するや、續いて第二第三部會の決議も亦無事可決された、この中には佛教の社會的指導原理の問題や又印度佛教代表スワミ長老始め大菩提會主事ヴァリシンハ氏等（ダルマパーラの愛弟）が悲痛なる叫びを擧げて佛教の同胞に訴へし所の、印度教徒の手に恢復せよ』といふセンセーショナルなる重大國際問題もある。『佛陀成道の聖地ブダガヤを佛教徒の手に恢復せよ』といふセンセーショナルなる重大國際問題もある。『佛教によつて最も恩惠を受け榮えし日本は、今や全世界佛教徒のリーダーとしての責を盡されよ』と、印度代表は叫んだ、あゝ我等日本始め各國のヤング　ブディストは、熱烈なる援助をこの聖業に與へんことを誓ふのである。

かくて總會議事は滯り無くすみ、聖歌『四恩の歌、佛教徒の歌』を齊唱し、なほ外國代表の主催地東京市民に對するメッセージあり、代表の謝辭あり最後に總裁の發聲により　天皇陛下の萬歳を三唱し又各國元首及び大統領の萬歳をも三唱して、こゝに東京に於ける大會を終了したのである。かくて屋上にて本願寺招待の午餐會に、舌鼓を打ち、午後五時五十五分、特別列車に搭じて一路京都に向つた。

この大會に於て、予は學者、教授、學生、一般社會の人士等、種々の人々と相識るを得たが、車中更に數多の人より揮毫を賴まれ、その中の一人なる濱松佛教團の坪井音次郎氏は、『河合さん、あなたの昨日の總會の時のお態度には涙がこぼれました』と言つて呉れられた。予も實に感激に堪へない。氏は信仰は眞宗であるが、通佛教の普及宣傳に從事されてゐる由である。この一人の土の實感を聞きしことに於て、亦他を推し量ることもなし得べく、予も亦聊か自ら慰むるに足るを覺ゆるのであらる。

二十二日朝五時二十分、各國代表等一行八百餘名は、曉靄を破つて水都大津に着き、花火、樂隊、殊に可憐なる小學生の日の丸の旗に迎へられつゝ縣公會堂に赴き、知事、市長、僧侶等の鄭重なる歡迎宴を受け、やがてみどり丸に乘じて琵琶湖をめぐり、遙かに比叡山麓　天智天皇の近江朝廷の故地『さゝなみや滋賀の都は荒れにしを……』を細雨の中に遠望しつゝ、途中、雄松に遊び次で新唐崎に上陸した予は船中休みなく、駒澤大學の光地君等に、佛教の國家的理想、轉輪聖王の思想や、平和、戰爭等に對するその見解を說き、今後帝都を中心とする學生佛教運動の抱負を語り合つた。

坂本宿院に晝食を喫し、この時、宗門の長老今成日誓師の弟子佐藤重賢氏に會した。氏は後に、左の如き鄭重なる一文を寄せられた。予は實に深き感謝に堪へない。

此度大會にての御活動感謝に不堪候、就中汎太佛青の本尊佛として釋尊を守られし事此度の大會の最大の收穫と存じ候

不順の候に候間爲法爲國大兄の健康を御祈申上候

七月二十七日　佐藤重賢

『釋尊を守られし事』の一句　餘韻切々　神氣恍として盡きず……予　最も感激に堪へざるを覺ゆるのである……

坂本を發ち一同ケーブルにて比叡の靈峯に登り、遙かに遠く傳教大師の故地と雄圖を偲びつゝ、根本中堂『消えずの燈』、講堂、戒壇院等、曾てはこゝに日蓮聖人が或は論議を聞はし、或は迹門の戒法を受

戒せられし、それらの遺蹟を感慨深く眺めつゝ、更に大師廟に詣で、去つて空中ケーブルに搭じて先を降り來たるや、あゝ六百年の昔、吉野朝の忠臣千種忠顯卿が、建武二年足利の賊軍を防いで孤軍奮鬪し遂に身を勤王の大義に殉へたりし、その遺跡を偲びては熱涙禁ぜず、省て予は、予も亦本大會に於て佛祖の御前に大義を操守しつゝ孤軍奮鬪し拳々匪躬の誠を盡して、聊かその果を成すを得たるを思ひこれ皇國泰平の賜とは言ひながら、ひるがへつて教界の現狀は、今猶ほ信仰區々分裂の有樣なるを思ふとき、はるかに建武の昔吉野朝の哀史を想望しつゝ、今昔の感うたゝ極まりなく……而て比叡の嶽上より遙かに京洛の町を瞰瞰しては、この地こそ曾ては父母が我等愛子の爲に老體を勞して多年育英界に働き呉れたまひしの地、今又義母が弟妹と共にわびしき暮しをなしたまへるの地――我も亦實にこの地に育まれてこの地に學びこの地に遊び、この地に再び信仰に復活して日生思師の薫陶を受け、眞理と運命に轉惱苦を重ねつゝ、學窓を出でゝ後悲喜交々幾辛酸、波瀾曲折いくたびか『甘きにがき――熱き涙』にそゝろ『人生の眞』を體驗したりしその地なるを思ひ、感慨一時に澎湃としてすゝろ漂渺無限の情に迫られつゝ……妙滿寺なる知己有田宏道師に伴はれて八瀬の地に下り、溪流に憩うて、やうやく洛北下鴨の地に老母弟妹と相見えたのであつた。

一夜の團欒を明くれば、二十三日、大會の閉會式の當日、予は過ぐる四月の義父の七週忌にも西下するを得ざりしを、御位牌の前に深く謝してその冥福を祈りつゝ、予は岡崎公會堂なる會場に至つた。

十時半、開會、壯嚴なる君ヶ代と三歸依文の後、議事として、本大會の宣言及び綱領を發表し、特に次回開催地の件は、印度、シャム、アメリカ、滿洲の四ヶ國が候補地なる爲、日本に決定を一任することゝなつた。かくて總裁、來賓の祝辭あり、また更に大會役員諸氏に謝辭を陳べ、つづいて大村議長等の挨拶あり、次で、セイロン代表ニッサンカ氏より、莊嚴を極めて佛舍利の贈呈式あり。氏は佛舍利の因緣を說きて『今やこゝに大聖釋尊の靈骨を贈る最も神聖なる行事を行ふに當り、佛陀の慈光が日本皇室を始め國民の上に及ばんことを願ふ、願はくは當地に、この佛舍利奉安の殿堂を建てられんことを』と陳べ、滿堂感激の拍手裡に朝倉委員長これを受け之に答へて謹んで佛前に之を奉安したのである。次で各國代表の謝辭あり、各國國歌奏樂裡に會旗を降納し、一同佛教青年會歌を合唱して後、柴田會長の發聲にて萬藏を三唱し、こゝに遂に佛教界空前の壯擧たりし、歷史的國際會議の幕を閉ぢたのであつた

午後は音樂及び講演會あり、夕、平安朝の源融や豊太閤の庭園を移せる名園、東本願寺の枳殼邸に於て園遊會を催し、夜七時より、久し振りになつかしき妙滿寺講堂に於て、印度、セイロン　中華、滿洲等の諸國代表の講演の殿を受けて、予も亦一場の熱辯を揮ひ、諸君への第一のおみやげなりとて本尊問題を說くや、信徒の人々甚だ歡喜し呉れられ、檀家總代西村氏始め熱田氏等幾多の人々の熱誠なる感謝激勵の辭を受けたのであつた。予は連日の奮鬪に聲を嗄らしつゝ且流汗を拭ひながら、寺門の方々に謝辭を述べつゝ、慈母等と共に歸宅せしは夜三更の頃であつた。

二十四日、つゞいて一同と共に大阪に至り、我國最初の寺院として聖德太子の御創建になる四天王寺等を觀て昔を偲びつゝ、中央公會堂にて歡迎午餐會を受け、更に各國代表の講演あり、夕、南海電車を驅つて高野の峯に上つた。夜九時に着し、晩餐の後十時より高野山大學主催の座談會に臨んだ。神代、森兩教授の司會により、先づ立正大學の濱田教授が『佛陀に還れ、自ら佛陀と成れ、人をも佛陀と成らしめよ』といふ三モットーを掲げられ、その佛陀と

いふのが、單に汎神論的、佛性的立場に止まるが如きに對して、予は更にその高次の實在界として、汎神論的內在性の關係を有しつゝも、それに對する超越的人格實在の佛陀とその世界とを高調するや、果然議論を沸騰せしめ、佛教と西洋哲學との關係等を更に語りつゝ、これに達する實踐の問題にも入り、甲論乙駁、夜半十二時を過ぎて漸く會を閉ぢ、宿坊の淡き夢路にまどろんだのである。

明けて二十五日、早朝、奥の院なる弘法大師の廟に到り、本堂に於て、一行の健康と世界平和の爲に古義眞言の修行なる理趣三昧の法要あり、つゞいて諸堂及び靈寶館を觀、別殿に於て歡迎午餐會を受け歸途の車中、予は印度のブダガヤ復興の戰士ヴァリシンハ氏等と、肝膽を披瀝して相語り、今後提携協力すべきを約しつゝ、大阪にて一同と別れ、予は此夜、立正大學の渡邊君と共に行いて、大阪の日蓮主義青年の佛青ハウスなる『香風洞』にて、同志の爲に法華經の社會理想と現代的行動目標に就て講演し信仰の核心にも觸れ、歸路を急いで京都の家に着きしは亦夜半であつた。

外國代表と大會役員の一行は、更に廣島にも赴いたのであるが、予はこれにてとゞまり、慈母弟妹等と久し振りに寛ぎ語りつゝ、尙ほ蓮日阪神の地に中學時代よりの舊友丹羽君等を尋ねて信仰を語り、友情を温め、一夜、家族と共に京極、四條、圓山公園等、京洛の地を逍遙して懷舊の情そゞろに深く、早くも二十九日、慈母弟妹と名殘りを惜しみつゝ、再會を約して東都に歸つたのであつた。

越えて八月二日、恩師本多日生猊下の遺業にして日蓮門下統合の促進機關たる知法恩國會主催の下に行はれたる、立正門下聯盟の第一回夏期講習會に予は再び統一團代表として列つた。

先に比叡、高野の諸靈地を廻り、今や身延の祖廟なる今上の『立正』の勅額奉戴の下に於て、嚴かに講習會奉告の儀典を擧げ、進んで、富士山麓なる北山本門寺に到る。比叡の迹門戒壇の故地を尋ねて後、今こゝに、日蓮聖人の高弟日興上人が、その大抱負を托されたりし本門戒壇の豫定地なる、大日蓮華王山下の雄大なる靈境に遊ぶ……仰ぎ見る芙蓉の雄姿、朝暾に輝き、雲表に聳えて、默々たる大教說を垂れてゐる。

この地に於て、四日間、宗史に造詣深き富谷日震師の『富士山下に於ける宗門史譚』及び日蓮門下最初の信仰的文學博士山川智應氏の『本門戒壇思想の復活』更に貴族院議員男爵井上清純閣下の『世界に於ける神國日本』なる、何れも實に靈感的なる至誠の辯を開き、その高邁の識見信念に教へられ、又陸海軍特派の川越守二少佐、關根郡平大佐の夫々專門的なる講演によつて、軍國民の責務を痛感し啓發せられつゝ、更に蓮日近傍の西山本門寺、蓮華寺、白絲の瀧等の名刹勝地と靈寶を拜觀し、天母山に登りて遙かに俯瞰しては『萬坊ケ原』の名もしるき日興師の雄大なる心事を偲び『生御影尊』なる——日蓮聖人御在世當時、その御姿を、中老日法師が刻み、高足日興師が身延下山の時、脊に負うて下りて此地に來られしといふ、その生けるが如き相好に接しては、あゝこれこの日蓮大士の慈眼、まさしく一は上に本佛釋尊の尊顏を瞻仰されつゝ、一は下に我等門下の佛子を慈愍せられゐることを——予はこの生御影尊の前に長〳〵立つて拜しゐる時、そゞろに深くこの靈感を受け、最後に岩本實相寺なる、聖人が立正安國論述作に當つて、五度び大藏經を閲讀せられ、その原稿をしたゝめられし幽邃閑寂の靈刹に詣でゝ、種々の靈寶、なかんづく當時聖人の御眼がそれを貫き眺め讀まれたりし藏經四冊——その御時のまゝなるその經典を手にとり拜しては、默識神通深く〳〵靈感に涵りつゝ、又聖人が原稿執筆に硯の水として使はれしその古き苔むす井戸を見ては、我も

亦さらに此の芳躅を次いで文筆に説法に、立正安國の大事を成辨せんことを誓ひて、感慨無量……去る所を知らず。かくて遂に歸り來つて大宮の島岩樓に於て、各講師の方々に熱誠の辯を揮つて深き謝恩感激の辭を陳べ、更に之に先だつ本門寺座談會の席上種々教學上の疑問に明答しつゝ、更に予は太平洋佛教會議の實況を語り、釋尊本尊の大事を陳べて『今や外に世界的なる佛教復興あり、佛徒の聯盟あり、太平洋の波は澎湃として我が皇國の岸を洗へるに、如何ぞ、佛教唯一の正系を以て任ぜる我が日蓮門下が、異體同心、以て佛祖の正法たりはた日蓮聖人の信仰教學たる一大法界の中心靈源——佛教の本門の大本尊　唯一本佛釋迦牟尼如來の御前に、一心合體ならざるを得んや。先づ大聖釋尊の下に日蓮門下の本尊を統一し、進んで精神形態二者共に門下統合の實を擧げられんことを切望するもの也』と至心衷情を披瀝して、參列の有志又殊に各宗及び國柱會等の青年學徒と、肝膽を吐露して提携協力せんことを堅く相約し、今後の活動を互ひに期しつゝ、名殘り惜しき別れを交して、つひに豊島ケ丘目白臺の霓雲樓に歸りしは、正に夜半一時のころであつた。

予はかの佛教大會に臨むの前日、深く靈感を受くる所あらむと、東郷元帥の展覽會に至るや果して深く感孚する所があつた。

天は必ず正義に與し、至誠は必ず神に通ず。

斷じて行へば鬼神も之を避く、大膽は最も安全なる道なり。

天祐と神助とに依り、未曾有の大勝を博し……

あゝかの名將よりこの言を聞くに於て、實に千鈞の重みあり。而て予はかの大會に於て、聊か之を實にする事を得、その戰法は丁字戰法を採り、その精神は東郷精神——然り日蓮精神を以て力戰健闘、竟に能く佛教の大義名分を確立擁護し、又以て君國の御恩の一分に報じまゐらせた。

省み來つて今、予は——そゝろ感慨無量である。あゝこれ人生に處するの道「聖者日蓮」と「名將東郷」——

かの千古曠世なる文武二雄は、今いかに我等に大默説を垂れんとするか……

予はこゝに、長き汎太平洋佛教青年會議と、立正門下聯盟の夏講會の記事とを終つた。去年の暮より牛歩に亘る著述生活をつゞけて、『皇道と日蓮主義』及び『日蓮主義皇道史觀』等の稿を終ふるや、直ちにこの會議と法筵に列して、聊か善戰健闘する事を得た。今此の記事を　謹んで　佛祖世尊　日蓮聖人　恩師日生上人の御前に捧げ、是を以て佛子陟明の、今後法國の爲に盡瘁活動せんとする誓願の言上と致す次第である。

日蓮聖人　開目鈔に云く

今度こそは強盛の菩提心を發して退轉せじと願しぬ。

大願を立てん　我れ日本の柱とならん　我れ日本の眼目とならん我れ日本の大船とならん　等と誓ひし願　破るべからず

能く正法を護持するの因緣を以ての故に、此の金剛の佛身を成就することを得たり

妙法蓮華經如來壽量品に云く

衆生既に信伏し　質直にして意柔輭に　一心に佛を見たてまつらんと欲して　自ら身命を惜まず　時に我及び衆僧　俱に靈鷲山に出づ　我時に衆生に語る　常に此に在つて滅せず

南無妙法蓮華經

日本精神運動と聖日蓮（中）

和賀義見

三、日蓮の生誕

承久三年の年は天柱摧け、國土も滅びんとするかと思ふばかりの驚きと悲みの間に暮れて、承久四年の春を迎へた。如月の十五日は大聖釋迦如來の入滅遊ばされた聖日である。その翌十六日の朝まだき、處は天照太神の御厨の在す安房の國、小湊の一漁村、世界第一の太洋の水平線を瞳々と昇り出づる旭日に照され、天は爲に一切の暗影を拂つて喜びの大光明に包まれた時、地には不可思議の瑞祥があつて海濱に白蓮が咲き出で、庭前には玉の如き泉の湧き出づる慶喜の中に、貫名重忠を父とし、梅菊女を母として孤々の聲を上げ生誕した善日磨は、日の國を祖國とし、日の神に祈りて生れし後の日蓮その人である。

此の年五月改元して年號を貞應元年と改められた善日磨は十二歳で清澄に上り道善坊に師事し、十八歳の年に出家して蓮長と改めた。救世の志願は大海の如く廣く、思國の熱情は烈々たる日輪の如く、洋々たる前途の希望を佛教の研鑽と、國家安泰の祈とに捧げて蓬らに使命實現の準備へと邁進したのである。

胎内にあつた時既に驚天動地の承久禍あり、生れては息詰る樣な末世窮迫の聲を聞き、そして神佛を敬ふ父母の慈悲の懷に育つた蓮長は、生れ乍らの宗教的熱情と、愛國の赤誠に燃え立つて遂に至誠血を吐くに至つた。誠は佛神に通ずる。虛空藏菩薩を使として智慧の明珠を授かつたといふ不可思議の靈感は、二十年間の研鑽を經て遂に佛法の濁亂を、亂麻を斷つが如くに解決し、日本建國の眞意義を握り、如來の使として如來の事を行ずべく、年三十二、建長五年四月廿八日旭ケ森に於て唱題、遂に開宗を宣言せしむるに至つた。

斯くして六十一年間の血涙に依つて織り作された大宗教は、日本建國の大精神を顯揚して娑婆即寂光の大理想實現の原動力を爲したのである。

四、邪正の別

先にも述べた如く念佛の一門は王法爲本と言ひ、禪の一家は興禪護國と言つては居るが、それは民衆をして御法度に背かしめないといふ程度のものや、乃至武士階級に潤達自在の氣風を吹き込んで己が傾士を安全に治め、主家に仕へて忠實ならしめたといふ程度の効果は慥にあり得た事であらうけれども、今日本が當面してゐる問題はそれらの問題よりも更に更に重大なものであつたのである。それこそ實に我國體の闡明と、末法の解決との大事にあるのである。蘇我氏の不臣の行ひも、將門の亂も、保元平治の戰、さては清盛の專横そして遂には承久の大禍亂を來さしむるに至る迄、その原因は要するに大義名分國體觀念が明らかにせられてゐなかつた爲ではなかつたらうか。河内の一豪族たる楠公が、挺身吉野朝廷の爲めに仕ふるに赤誠を以てし、一族を擧げて大義の爲めに殉じた節操は、末代に至る迄我等日本人の魂を覺醒し血涙を搾つて報國の志を奮起せしめる。尊氏の後醍醐天皇に叛き不忠不義の逆臣として今日尚童蒙にさへ鞭打たるゝものは、偏に國體信念の不明に起因したるものではなかつたか。

思ふにその持つ處の信念は思想の源であり、思想

は更に人間生活の動向を規定する。彼の尊氏は地藏觀音の信仰をもつて居た。兵亂に依つて十萬の人を傷けた購ひに十萬體の地藏を作らうとしたことや、觀音に願文を捧げて直義の爲に福あれかしと祈り、自ら遁世の志を述べたこと等は、人に將たる器量などと共に尊氏擁護論となつて、某閣僚の引責辭職と迄なつたのであるが、こは根本たるべき大道を見失つてゐる處から來た誤りでなければならない。觀音、地藏に對する思想は佛教に於ては支流を爲すものである。支流に止つて佛教の本流正系を捉へ得なかつたといふ事が、彼尊氏の思想に影響するのである彼が笑を含んで馬上豊かに敵に向ふ武者振り、群將を能く統御するの器量等は、源氏の鎮流であるといふ條件と共に、彼に對する人望を集むる上に役立つた要素ではあつたらうけれども、正統支流の關係に於て明確にせられてゐなかつたといふ事が、大義名分を誤るの素因であつたことは有識者の最も留意しなければならぬ處である。

之に反し吉野朝廷側に於ては、後醍醐天皇を初め奉り、新田、楠木の名將共に佛教の正統たる法華經を信奉して居つたのである。

後醍醐天皇は吉野に於て崩御遊ばさるゝ時、畏も左手に法華經を握り、右手に寶劍をとらせ給ひしまゝ神去りましましたと傳へらる。

新田義貞は尊氏と共に源氏の出、互に源家の統領たらんとして勢力を爭つたのであつたが、彼の信奉する處の宗教は法華經であつた。新田公を祀つた藤島神社の神寶は實に彼義貞の頭に戴きし兜であるがその兜の内には『如來秘密神通之力』の一句を記してあるのである。此の一句は法華經書最品の肝要であるから、即ち佛教の正統を奉持して居たのである。大楠公に至つては人の知る如く幼名を多聞丸と呼んだことに依つても明白である如く、佛教には深き因緣を持つて居たのである。特に湊川神社の寶物となつてゐる建武二年の願文は、楠公が如何に法華經を信じて居たかを證據立つる重要な史料である。その願文、法華經書寫の奥書を左に掲げる。

夫法華經者、五時之肝心、一乘之腑藏也、據レ斯三世之導師、以テ此經一爲二出世之本懷一、八部ノ冥衆、以テ此典一爲二護國之依憑一、就中本朝一州、圓機純熟宗廟社稷、護持感應、僧史所レ載粹具二緣細一、爰ニ正成恭モ仰テ二朝憲一敵二對逆徒一之刻、天下屬二靜謐一心事若相協者、毎日於二當社寶前一、可レ轉二讀一品一之由、立願先畢、仍新二寫一部一所レ果二宿念一如レ件、敬白。

建武二年八月廿五日

從五位上行左衛門少尉兼河内守
楠朝臣正成　敬白

此の願文に見るが如く『夫れ法華經は五時の肝心一乘の腑藏なり、斯に據つて三世の導師此の經を以て出世の本懷と爲し、八部の冥衆此の典を以て護國の依憑と爲す（中略）爰に正成恭しく朝憲を仰いで、逆徒敵對するの刻、天下靜謐に屬する心事若し相協はば毎日當社寶前に於て一品を轉讀すべきの由立願先づ畢んぬ、仍つて一部を新寫して宿念を果たす所件の如し』とある。如何に大楠公が法華經を以て鎮護國家の寶典と仰ぎしかは洵に明白なことである。

斯の如く法華經は常に正義の源泉であつた。

五、日本精神運動の先證

省みれば南都の佛教漸く爛熟し道義頽廢せんとしたる時、一意、身を挺して國體を擁護せし和氣清麿は傳教大師の外護者であり、そして傳教大師は法華一實の教を以て國民皆菩薩の大理想を實現せんと努力せられたのであつた。

更に溯つては我國文化の礎を築き給へる聖德太子が、法華、勝鬘、維摩の三經を以て鎮護國家の經典となし、その中心を法華經に置き給へることは普

く人の知る處である、世間偶々聖德太子に對する誣說を爲すものがあるけれども、そは誤れるも甚だしきものである。斯る徒輩は却つて我國體精神を誤る結果を招來することを考へなければならない。

兎にも角にも聖德太子以前に於て平群大臣馬鳥は簒奪を企て、蘇我氏は弑逆を敢てする程、氏族制度は高度化の爛熟狀態に置かれ、その弊害は政治經濟思想、軍事等諸般にわたつて最も恐るべき非常の狀態に置かれて居たのである。土地人民の私有兼併そして大義名分の頽廢せる實狀は、武士の鋒起以降北條、足利の下剋上時代と何等選ぶものなき狀態に置かれ、或意味に於ては之より甚だしきものさへあつたことを否定することが出來ない。殊に國際關係に於ては新興隋國が支那大陸を一統し殆んど我國を屬國視して居た。そして又九州地方の豪族の中には倭土國王の印授を隋王に受け、國を賣るの誤りさへ爲して居たものがあつたのである。斯る時太子は十七ケ條の憲法を制定して王政復古の大運動を起されたのである。『國に二君なく民に兩主無し率土の兆民王を以て主と爲す』と名分の大本を闡明遊ばされたのである。土地人民の兼併を禁制し、群雄覇を爭ふの弊を停めて『和を以て貴しと爲す』と國民の協力團結を計られた。そして篤く三寶を敬ふ事に依つて國民の精神を陶冶し、國體を誤るの謬弊を一掃して、後年その養成せる人々に依つて大化改新の大業が爲し遂げられたのである。殊に國際關係に於て我國の獨立を宇內に闡明し『日出づる國の天子書を日沒する所の皇帝に致す』と對等以上の辭禮を以て獨立自主の外交を確立し、初めて屬國視せられた國辱を拂拭し隋王をして啞然色を失はしめたるが如きに至つては、太子の功績赫々として永劫に記念せられなければならない。

然も太子が十二階官位の第一『大德』を眞人公と呼ばしめ給ひしに至つては我日本精神の心髓を示教

せられたものと言はなければならぬ。

我惟神の道は一言にして之をいへば包容歸本の德を有する所にある。神儒佛三教を融合して一大文明を創造するの典型を、太子に於て初めて示されたものであることを國民は强く記憶しなければならないのである。

近來日本精神と言ふ者の中に、日本精神とは支那思想、印度思想、歐米思想に影響せられざる以前の我國獨自の精神運動であると論斷を下して居る者があるが、我惟神の大道は決して固定化し進步發展のない偶像ではない。寄生徒食の徒、一部の輩の專斷を許さぬ。軍人であらうと農民であらうと職工、役人、僧侶、神官、教育者、藝術家等々の區別なく國體の本義を奉じ、是を擁護し來りし人によりてのみ傳統せられるのである。

聖德太子は物部、蘇我二氏の黨が、神佛二教をして一族の繁榮を計らんとする爲の鬪爭の具としたものを、國家の手にとりかへされたのであつたが、今日猶一部の輩徒が、勢力扶植の手段として殊更に固陋排斥の偏見に墮し、上は佛教を尊信し給へる歷代の聖德を傷け、神儒佛三教の教化によりて奮起大成せし幾多の忠臣良弼を罵るに至らば、日本歷史の崇高にして世界に卓越せる史料の半を失ふに到らしめん事を慮らなければならぬ。佐藤信淵氏の如き人にして、猶平田篤胤氏が『靈の眞柱に我國人は神胤なり外國の人は土塊なり』と云ひしを公正ならずとして其著『天柱記』に誡めて居るではないか。華夷の思想は支那に於て發生し、山鹿素行、吉田松陰先生等の志士仁人によりて我國獨創の意義を持つに到つた。併し乍ら若し其眞意を過つて徒らに他國をあなどるはユダヤの思想に類似し、かへつて『上は則ち乾靈國を授くるの德に答へ、下は則ち皇孫正を養ふの心を弘めむ、然して後六合を兼ねて以て都を開き八紘を掩ひて宇と爲さんこと亦た可からずや』との

神武鳳勅の精神に悖るの失あるを誡めなければならぬ。この意義に於て已に七百年前國體觀念の地に墮ちんとするの危期に於て、瞭然眞乎の日本男子の意氣に立ち、國體正義を顯揚し、深遠不動、統一開顯の大宗教を建立したる聖日蓮によりて我國の宇内に卓越せる優秀性と、世界人類をして其慶福を共にし人格完成乃至世界成就の大指導者たるべき我日本の大使命を提唱せるの事實、特に殊筆して大方の有識者に其研鑽を勸設する。

（次續）

謹告

本多上人の肉聲を
只今聽くことが出來ますのは、實にこのレコードあるが爲めです。

御家庭に是非一組をお備へになつて、信仰の妙味を兒孫にお傳へ下さい。
遠方でも安全に御送り出來ます

『佛教の信仰』（兩面二枚一組）
金參圓也　送料　金廿五錢

財團法人　統一團
東京市小石川區音羽町
振替東京九四二〇番
電話牛込五三三六番

法華經講話（第九講）

文學士　小林一郎

妙法蓮華經序品第一（承前）

今晩は大變な風雨でありまして、皆さんがお出かけ下さるにも、非常に御困難であらうと存じましたが、この雨風を冒してお集りになりましたことは、まことに有難く存じます。私共が今の世の中に處して、自分の信仰を貫いて行くといふ上に於ては、いろ〳〵面倒な事もありませう、今後に於て幾多の雨風に遭ふといふことは覺悟しなければなりませぬ。雨にも風にも負けないで、自分達の信念を貫いて正しい道を守つて行かうといふ決心が大事でありますその心持を固める爲には、或は雨風のあるといふことも意味の有ることであるかも知れませぬ、法華經の一通りのお話を濟ましますには、かなり長い年月が要るだらうと想ひます。その間にはいろ〳〵な障礙もあらう、雨風ばかりではない、その他の障礙もあるかもわかりませんが、そのいろ〳〵な障礙の中を通り拔けて、お互に正しい信仰を養ふ上に力を用ひるといふことが最も肝要であらうと思ひます。今夕は大變御困難であつたらうと思ひますが、その困難の中を冒すといふことが、又他日になつて想ひ出せば却つて歡喜の因になるかと思ひます。

前回には序品の中の、いろ〳〵な佛道修行の種類を列べて說かれてある所を讀んで居りました。一番初めには布施といふことで、菩薩の行としては布施

が第一である。何といつても吾々凡夫はいろ〳〵な煩惱があつて、その煩惱の爲に物事を正しく見ることも出來ない、正しく判斷することも出來ないのでありますが、その煩惱の根本は何だらうといふと、要するに自己中心といふことです。『煩惱』といふ言葉は、チヨツト今の我國の通俗の言葉にはありませぬが、これを現代の言葉に飜譯すると自己中心といふことになります。なんでも、自分を中心にして考へる、それが煩惱です、一體人間といふものは、一人で生きて居られるものではない、他の人の力を藉らないで、一日でも、一時間でも生きて居られるものではない、その代りに又自分の骨折が幾らか他の人の役にも立つて居るので、お互ひに持ち合ひ、お互ひに救ひ合ひ、お互ひに教へ合つて生きて居るのが人生であります。その人生の本當の意味を忘れてしまつて、なんでも自分を中心にして考へようといふことが根本の間違ひで、その間違ひが種々なる煩惱となつて現れるのです。百八の煩惱などと申しまして、算へ立てれば際限が無い、いろ〳〵な煩惱がありますけれども、その根本は自分を中心にするといふことです。なんでも自分を中心にして考へるだから子供となつては、親が自分だけを可愛がつて呉れゝば宜いと思ふ。親となつては、子供が自分にだけ優しくして呉れゝば宜いと思ふ。世間に立つては、友達が自分にだけ親切にして呉れゝば宜いと思ふ。なんでも自分といふことだけを中心として考へる。お互ひがさういふ考を有つて居るのですからそのお互ひの利害の關係といふものはどうしても衝突する。そこから總ての迷ひが起る。それが煩惱です。

その煩惱を除かうと思ふならどうしたら宜いかといへば、それは自己を中心としないやうな行ひを續ける外ない。前にも申した事でありますが、乾いたものを濡らさうと思へば水の中に浸けるより外ない

濡れたものを乾かさうと思へば火の上に置くより外ない。だから自分を中心にするといふ心持を除かうと思ふならば、自分をスツカリ捨てた行ひを勵まなければならぬ。それは初めは苦痛です。人間は皆自分さへ宜ければいゝと思つて居るのに、自分を捨てゝ他の人の爲に力を盡せといふやうなことは、骨の折れることで隨分辛いことでありますが、さういふことを續けて居る間にはそれが樂しみになつて行く、これが有難い事だといふやうな氣分になります。

さういふやうな行ひを續けるのが菩薩行である。菩薩行といふ中にはいろ〳〵な區別もありますけれども、根本はそこです。即ち自分を捨てゝ他の人に施すといふ、所謂布施の心持が根本です。前回にも申したやうに、自分の我儘を捨てるといふ、則ち能捨の心持があれば、他の人に施すといふ能施の心持も出來て來る。能捨から能施が出て來る。そこからやらなければいけないのです。ですから先づ捨てることが出來なければ仕樣がない。現在美味い物を食べて居る、美味い物でなければどうしてもいけない。不味い物ナンか食べられないといふ心持があるならば、さういふ人は、世の中が變つて行つたら到底生きて居られはしない。現在大きい家に住んで居る、小さい家ナンか迚も住めないといふ心持があるならば、世間が變化したらどうにもならない。だからそこが能捨で、捨てられる心持がなければならない。と言つて無理に今質素な生活をしなければならぬ、乞食のやうな生活をしなければならぬといふのではありませぬ。今は美味い物を食べられるならば食べても宜しいが、いざとなればこの美味い物を捨てゝも宜いといふ覺悟がなければならぬ。今は絹の着物が着られるなら着て居つても宜しいが、いざとなれば木綿の着物でも平氣で居られるといふ心持がなければならない。それが能捨です。この心持が無いと世の中はうまく行かない。人生といふものはど

う變るかわからないものです。そのわからない人生に生きて居つて現在の生活をどうしても保つて行かう、大きい家に住んで居る人は小さい家には住めない。美味い物を食べて居る人は不味い物は食べられない。斯ういふ事であつたら、世の中が變るに從つて自分の心も身もまるで無茶苦茶になつてしまふ譯です。だから今すぐに質素な生活をしなくても宜しい、今すぐに乞食の境涯に入らぬでも宜しいが、いざとなればあらゆる物を捨てられるといふ能捨の心持を、平生に於て養つて置くといふことが最も大事です。さういふやうに總てが捨てられる心持であるならば、今度は餘つた物を人に施すといふ心持にもなる。ですから能捨から施能が出て來るのです。

さういふ氣分を平生に於て養はないといけない。いざとなつて忙しい時に急に慌てゝも間に合ひませぬから、事の無い時、平生無事の時にその心持を養つて置くことが大事であります。これを銘々の家の內に於てやらなければいけない。天下の爲とか國家の爲などと言つても、自分の家を清らかに治めることの出來ない人が、世の爲、人の爲に本當に盡すことが出來る譯はないのですから、銘々の家の內に於て、どんな苦しい事があつても、どんな辛い事があつても、それに耐へられるやうな氣分を造つて置くそれが能捨です。その氣分が出來ますれば、餘裕のある時には人に施さうといふ、所謂能施の出來る氣分になつて行くのです。皆がさういふ氣分になりさへすれば、世の中の面倒な問題といふものは大概片付くのであります。

それで前回に讀んで居りました所は、その能く捨てるといふこと、つまり能く施すと言つても同じでありますが、人に施すことの出來る行ひが大事だ。そこから佛の道に入れるのだといふことを說かれて居ります。であるから『施を行する』と言つて、布施をする者がある。それは金銀とか、珊瑚とか、その他いろ〳〵な物を皆施して、自分は一向さういふものに執着が無いと言つて他の人の幸福を圖る『歡喜して布施する』と言つて、世間の義理だなどと言つて出して居るのではいけない。施すことを歡喜として、心から喜んで布施する者があれば、その人はだん〳〵と佛樣のやうな心持になり、結局は成佛と言つて佛と同じ境界になるだらうといふのであります。

或は菩薩の　駟馬の寶車に　欄楯華蓋あり　軒飾あるを布施する有り

（或有二菩薩　駟馬寶車　欄楯華蓋　軒飾布施一）

或は又菩薩といふ大衆の修行をする者が、四頭の馬で輓くやうな立派な車だの、又その車には欄楯が附いて居つたり、上の方には屋根が美しくあつたり、綺麗な飾りなどの附いて居るものを、少しも惜氣なく人に施す者もある。斯ういふことは、要するにいろ〳〵な自分の慾望を捨てゝ、自分の我儘を捨てゝ人の爲に役立てばそれが嬉しいと思ふ。さういふ氣分を樣々な方面から說かれて居るのであります。

復た菩薩の　身肉手足　及び妻子を施して　無上道を求むるを見る

（復見二菩薩　身肉手足　及妻子施　求二無上道一）

或は又菩薩が、自分の身肉や手や足や、或は妻子までも人に施して無上の道を求める者もある。この事はチョット誤解があるやうでありますから、煩しいやうですが少しく申して置きたい。妻子を施すといふやうなことがお經の中に澤山書いてあります。自分の妻や子供を人にやつてしまふナンといふ、そんなことが人情として出來ることではないでせう。所がお經にさう書いてある。自分の手でも足でも、妻でも子でも施すと書いてある。そこでその意味を十分に知らない人が、佛敎の覺りを開く爲には、手を切つたり足を切つたりしなければならない。女房でも子供でも人にやつてしまはなければならないの

か、斯う思ふのでありますけれども、一體そんな馬鹿なことが出來るものですか。所がそんな事を文字通りに取つた人があつて、二三年前に帝劇で芝居をしました。布施太子といふ人が自分の覺りを開く爲に、妻や子供を人にやつてしまふといふ所を芝居でやりました。自分は覺りを開く爲にお前達をやつてしまふのだと言つて、泣き悲んで居る。妻や子を他の人に引渡すといふやうな場面がありました。御覽になつた方もあるかも知れませぬ。私の友達がそれを見て『驚いた、どうも佛敎といふものは恐しいものだ、自分一人覺りを開く爲には、女房でも子供でも皆人にやつてしまふのださうだ、あんな敎が勢力を有つたら世間は滅茶々々になつてしまふ、なんといふ馬鹿な事だ。お前はあんな敎を弘める爲に骨を折つて居るのか、一體どうした事だ』と言つて私の所に談じ込んで來たことがあります。それは無理もないことです、自分一人が覺りを開く爲に、妻や子を皆人にやつてしまふといふ、そんな事が本當の事ならば、こんなくだらないことはない。併しそれはお經の文字に執はれるからであります。手や足を人にやるといふことは、自分が手足の勞力を惜まずして人の爲に盡すといふ意味です。隨つて妻や子を人にやるといふことは、決して自分の女房や子供をソックリ人にやるのではなくして、大事な人の爲には妻にも言ひつけてその人に仕へさせる、子供にも言ひつけてその人に御奉公させるといふ意味です。だから妻子を施すといふことは妻子の身を施すのではない。妻子の骨折をその人の爲に施すといふことです。さう考へれば決して無理はないでせう。偉い人があつて世の中の爲に力を盡して居るならば、自分もその人の爲に親切にしてやる。自分一人では足らないから、女房でも子供でもやつて、その大事な人が平和に每日を送れるやうにお手傳をしてやるといふことは善い事であります。その意味を言つて居るので、決して妻や子供を人にやつてしまふ譯ではない。やつてしまつたら却つて向ふで困るでせう、そんなことを言つて居るのではありませぬ。すべて經典を讀むのには、文字に執れずして、その中に含まれたる意味をしつかりと捉へることが大事であります。その意味を捉へることが出來ないで、文字に執はれる所から、佛敎といふものが活きた人生と緣の無いやうなものに久しくなつて居るのであります。今後は、それではいけませぬから、その精神を確り捉へて、さうしてこれを吾々の日常の生活に役に立てるやうにしなければならぬと思ひます。この所もその意味で讀んで行けば能くわかる譯です。

又菩薩の　頭目身體を
欣樂施與して　佛の智慧を求むるを見る
（又見三菩薩　頭目身體　欣樂施與　求二佛智慧一）

これもさうです。なにも自分の身體を人にやるといつて、眼玉を刳り拔いてやつたり、頭を打割つて腦味噌を人にやつたりする譯ではない。自分の身のあらゆる骨折を他の人の爲に費して惜まぬといふ意味であります。身を人にやるといふことは、身の骨折自分の一身の勞力を惜まずして人に施すといふ意味であります。さういふ意味に解釋すれば少しも無理なくやれます。

文殊師利
佛所に往詣して　我諸王の
便ち樂土　無上道を問ひたてまつり
鬚髮を剃除して　宮殿臣妾を捨て
（文殊師利　我見下諸王　往二詣佛所一　問二無上道一　便捨二樂土　宮殿臣妾一　剃二除鬚髮一　而被中法服上）

又諸の王樣が佛樣の所に詣つて無上道を問ひたてまつり、さうして自分の領地だの、御殿だの、召使などを捨てゝ、身の裝飾などもスッカリ除つてしまつて、法服を被ると言つて、佛樣のお弟子になつた印として、極く粗末な着物を着て居る者なども眼の

前に見えて居る。これも文字通りに取つてはいけないのです。王樣が自分の位を捨てゝ、佛のお弟子になつて汚ない着物を着て山の中に住んで居ると書いてある。そんな事を本當に皆がやつたらどうなりますか、天子樣が位を捨てゝしまひ、總理大臣も辭職してしまひ、役人も皆辭職してしまひ、皆が自分の地位を捨てゝしまつて、佛樣のお弟子になつて、汚ない着物を着て山の中に住んで、日本中の有力な人が皆山の中に入つて麥飯を食つて暮して居るとなつたら、國は潰れてしまふ。そんな馬鹿な、まるで時代に合はないことを佛樣がお敎へになる筈はありませぬ。若しそれが佛敎であるならば、佛敎などは廢してしまふ方が宜い。けれどもさういふことではない。王樣が自分の位を捨てるといふことは、王となつて自分の慾望を滿して我儘をするといふ、その心持を捨てることです。これは大事なことであります。これはすべて心の問題であります。金のある人が、自分は金があるからと言つて、金の無い者を馬鹿にするやうな心持であるならば、世の中は決して平和にならない。地位の高い人が、自分が地位が高いと言つて、世の中の身分の無い人を侮るやうな氣分であるならば、世の中は善くならない。だからそれを言ふのです。國王は王の位を捨てるやうな氣分になつて呉れ、自分が王だと言つて我儘をするといふ、そんな心持を捨てなければいけない。總理大臣は、自分は總理大臣だから誰でも頭を低げるだらうといふやうな心持は捨てなければいけない。億萬の富を持つて居る人は、自分が金があるから皆が足下に這ひつくばるだらうといふやうな心持は捨てなければいかぬ。さうして世の中の憐れな者、世の中の惱める者に同情を有つて、その苦しい境遇に居る者と一緒になつて世の中を送らうといふやうな清らかな優しい心持をつくらなければいかぬといふことです。それを王樣が王の位を捨てるとか、長者が自分の財

產を捨てるとかいふ言葉で言ひ表はされて居るのであります。ですからその言葉に執はれないで、その精神を酌んで讀まなければ、經典といふものは今の時代とは少しも一致しないことになる。そのお考で讀んで戴きたいと思ひます。

さういふ心持を酌んで行けば、この經典の文字は皆自分達に有益なものになる。國王となつても國王の位を捨てるといふ氣分になり、長者が巨萬の富を積んで居つてもその地位を捨てるといふやうな氣分になり、世の中の憐れな者を見ればこれを敎ふといふことが、それが本當の佛道であるといふ心持になりますと、世の中は本當に平和になつて行きます。その意味を玆に表はして居るのであります。

或は菩薩の　而も比丘と作りて
獨り閑靜に處し　樂みて經典を誦するを見る

（或見菩薩　而作比丘　獨處閑靜　樂誦經典）

『比丘と作る』といふことは所謂出家するといふことであります。出家といふことは、必ずしも自分の家を離れて山住ひをすることばかりを言ふのではない。

出家（身出家　心出家）

妻子を捨て、自分の家を離れて、山の中で一人で暮して居るといふのは身出家といふ、身の出家です。併し身の出家といふものはそんなに偉いものではない、寺に居つて法衣を着て袈裟を掛けて居りながら『儲けたいナ、地位が欲しいナ、なんとかして樂に暮したいナ』と思つて居るならば、身は出家して居つても心は出家しないのであつて、そんなものは何の役にも立たない。本當に大事なのは心の出家です佛敎はなんでも心の敎でありますから、心が大事です。心の出家とはどういふのかといふと『不求』と言つて求めない心持です。人から何とかして貰ひたいナといふ心持をやめなければならない。世間は複

雜であつてだん〳〵面倒になつて來ますが、この時代に於て一番大事なのは求めない心持です。自分は人に何とかしてやりたい、人からは何もして貰はぬでも宜いといふ、さういふ氣分になれば非常に氣が樂です。それが求めない心持です。子供となつては自分の親は年取つて居るから優しくして上げよう、親から何もして貰はなくても宜いと思ふ。親となつては、子供をどうぞ安樂にしてやらう、子供から別に孝行して貰はなくても宜いと思ふ。夫となつては女房は女で氣の弱いものだからこれを保護してやらう、女房から何もして貰はなくても宜いと思ふ。女房の方は、夫は忙しいのだから自分が出來るだけ世話をして上げよう、夫から何もして貰はぬでも宜いと思ふ。斯ういふ風にお互ひに求めずして與へようといふ氣分を以て相接するならば、一軒の家の内でも、一つの町でも、國でも皆善くなります。それを求めるばかりで、こちらからは與へないといふ氣分が多いものだから、皆が背中合せになつてしまふ。そこが大事な所でありまして、自分を捨てるといふのは、求めずして與へようといふ氣分をつくることです。互にさうなつたら、家の中でも世の中でもうまく行くのです。要するにその修行であります。難しく言へば際限がありませぬが、菩薩の行といふのは根本はそれです。皆が求めずして與へるといふ心持になる、さうすれば世の中はうまく行く。

それが出來ない事だと思つてはいかぬ、やれば出來る事です。例へばお母さんが小さい子供を膝の上に抱き上げて、乳を飲ませて居る時はどうですか、求めずして與へる心持でせう。『この子供に十分間乳を飲ましたら五圓お禮があるだらう……』などと思ひはしませぬ、『一時間乳を飲ましたら幾らお禮が來るか……』そんなことは思ひはしない。だから人間の誠心があれば求めずして與へるといふことは出來得るのです。母親と赤ん坊の間では出來るので

すから、さういふ心持をあらゆる人に、あらゆる場合に養つて行つたならば、世の中といふものは温い世の中になり得る。これをやらなければいけないのです。ツイ〳〵お互ひは眼の前の世間が複雜ですから、さういふことを忘れて居りますけれども、その求めずして與へるといふ氣分、それが菩薩行の根本です。皆がその氣持になるやうに、先以て己れを修行して他の人をその道に導いて行くやうになつたならば宜しい。比丘となつて出家するといふのはさういふ意味です。世間の求める心持が無くなるといふことが本當の出家であります。

又菩薩の　勇猛精進し
深山に入りて　佛道を思惟するを見る
（又見て菩薩勇猛精進入二於深山一思惟佛道上）

これもたゞ文字通り取つてはいけないので、山の中に入つて一生懸命に佛の道を考へると書いてありますが、今私共が世の中のいろ〳〵な仕事をして居るのに急に山の中などに入れる譯はありませぬ。然らば山の中に入るといふことはどういふ事かと言へば、『世の煩累を絶つ』といふことです。文字通りに取つてはいけない、深い山などありはしない、東京近邊などは何處へ行つたつてそんな山などはありはしません。山に入るといふことは、世間の面倒な關係を姑く離れるといふことで、これは必要です。商賣をする人が商賣に熱心なのは宜しい、役所に勤めて居る人が役所の事務に熱心なのも宜しい、けれども偶にはさういふ世間的の關係をスツカリ離れてしまつて、靜かに考へるといふことが必要なのです。それが世の煩累を絶つといふことであります。商人が商賣の事ばかり考へて居つてはいけない。お役人が役所の事ばかり考へて居つてはいけない。それも大事ですが、時あつてか、さういふ事を離れてしまつて、一體自分は人間としてどう生きたら宜からうかといふことを確りと考へる必要がある。それでな

ければ本當の世渡りといふものは出來ない。自分の職務を本當に果さうと思ふならば、時には自分の境遇や何かを離れてしまつて、人間としての道を靜かに考へるといふことが必要であります。

弓のことにお精しい方も居られるか知りませんが弓に矢をつがへて射ます。あの時にその矢が勢ひ良く出る爲にはどうしたら宜いかといふと、弓に始終弦を掛けて置いてはいけないのです、時々は弦をはづして弓をその儘立て掛けて置いて、さうして必要がある時に弦を掛ける。さうすると射る時にうまく行くのです。始終弦を掛けて置くと、弦が弱くなつて本當に勢ひよく矢が進まない。それと同じ事であります。人間も商賣をするからと言つて商賣ばかり考へて居つてはいけない。役所に勤めるからと言つて役所の事ばかり考へて居つてはいけない。時あつて弓の弦をはづすやうに、日々の自分の仕事をスッカリ捨てゝしまつて、さうして人間をしてどうすればよいかといふことを考へて見なければいけない。その自分の仕事を離れて考へた事が、それが仕事の本當の力になる、そこが大事であります。今茲に山の中に入つて修行をするといふのは、なにも山の中に入らなくても宜しい、入つたやうな氣分になつてせめては三日か四日に一度ぐらゐは自分の仕事をスッカリ忘れて、一體人間としてどうしたら宜いかといふことを靜かに考へて見る必要がある。それが出來ないといふと、眼の前の事ばかりに執はれてしまつて、結局自分の職務を完全に果すことが出來ないやうになつて行くのです。經典に書いてある事は、さういふ風に自分達の境遇に引き合せて考へると實に適切であります。

自分の身の上話を申上げるやうで恐縮でありますが、私は明治三十五年に學校を卒業して間もなく、神奈川縣の或る地方の中學校に教頭といふ名前を附けられて赴任致しました。今ではなか〳〵學校

を出てもそんなに待遇して呉れませんが、吾々が卒業した頃には、大學を出ると相當重く用ひられたものでありまして、或る中學校の教頭になつた。まだ年は若いし、一向譯はわからないのですけれども、マア教頭といふことで修身と英語を受持つてやつて居つた。さうすると忽ちにして學校の老練な先生と衝突を始めた、こつちは學校を出たばかりだから相手の樣子がわからない。何でも藝地に行く。學校には十年も二十年も教鞭を執つて居る老練な人が澤山居るから、さういふ人の意見と私の意見と一致しようう筈がない、忽ちにして衝突してしまつた。こつちは若くもあるし、藝地に『そんな馬鹿なことがあるものか』といふやうな調子でやる、相手は『なんだお前は年が若いから世間がわからないのだ、お前のいふことなどは駄目だ』といふ譯で、到頭意見が衝突して、私は辭めるつもりになつた。『そんな馬鹿なことがあるか、教育をすると言ひながら世間の事などを考へて居るやうでは迚も仕樣がない、俺は辭めてしまはう』といふ決心をした。それから自分の下宿へ歸りまして、校長宛に辭表を書いて、明日の朝これを使に持たしてやらう。それからモウ東京へ歸るつもりだから、荷物といつても碌なものはない柳行李に一杯も詰めればそれでお終ひですから、荷物を拵へて繩で縛げてしまつて、愈々明日の朝一番の汽車で東京へ歸らう、併し暫くの間此處に居たので名殘りが惜しいナと思つて、晩飯を食べてから、最後の名殘りを惜しまうと思ひまして、町を歩いたそこに小高い山があつて、その山の上に登つて、ズッと町を見下して居りました。愈々明日はこの町とも別れて歸るのだ、思へば名殘りが惜しいナと思つてジッと見渡して居ると、自分の學校が遠くに見える。高い山の上ですからこればかりに小さく見えるさうして校舍の窓がホンの小さく見えて居る。それを遠くに見て私は感じた。『なんだ、あんな小さい

窓の中で俺は喧嘩をしたのかナ、お前の意見が、イヤ俺の意見がと言つて、あの小さい窓の中でやつて居たのだ。俺もお前もあつたものではない、あんな所で喧嘩をしたのか、馬鹿々々しいナ』と思つた。

さうしたら今までの憤慨がスーッと消えてしまつた。それから宿へ歸つて早速柳行李に掛けた繩を切つてしまつて、校長へ出す辭表を破つてしまひました。翌日の朝はいつも通り暢氣な考になつて學校へ行つたものです。さうしたら『なんだ、君は昨日の夕方喧嘩みたいな顏をして歸つたが、今日は大層やさしくなつて來たナ、マアよい鹽梅だ、當分居て呉れ』といふ譯で、それから私はその學校に十年居りました。そんなものです。逆上が下るとなんでもない、高い山の上から學校を見下して、あんな小さい窓の中で喧嘩をしたのか、馬鹿々々しいと思つた。それでスッカリ今迄の行き掛りが消えてしまつたのです。

それで私は今でもさう思ひます。人間が世間よりも一段高い立場から見ると、人生の爭ひナンといふものはたわいないものです。それに執はれて居るといふことは要するに小さい事だ。斯ういふ風に氣が附きますと、なんでもないのです。私共は凡夫ですから、そんな高い山の上に行つて見下してから初めて氣が附くのでありますけれども、本當に覺つた人であるならば、必しも山の上に行かなくとも、人生を靜かに見下してさういふ考が附く譯でありませう。世間を離れて山の中に入つて佛道修行をするといふことはその意味です。世間に執はれない心持を以て行けといふ意味です。さう思つて居ればなんでもない、周圍中の出來事は、高い山の上から見下した小さな窓みたいなものである。人生の利害損得などはどつちになつても、そんな事に執はれない、モット廣い、モット明るい氣分になれば、世の中といふものは實に渡り易いものである。さういふ事を教へられて居るのであります。

又欲を離れ　常に空閑に處し
深く禪定を修め　五神通を得るを見る

（又見下離レ欲　常處二空閑一　深修二禪定一　得ル五神通上）

空閑といふのは周圍から厄介にならないやうな、洵に靜かな境遇に居ることです。さうして『五神通を得る』といふ、これは五つの神通力といふことであります。

天眼通
天耳通
神足通
他心通
宿命通

この五つを五神通と申します。天眼通といふのは、人に見えないものが見える力、天耳通は人に聽えない聲が聽える力、神足通は人の行かない所にまで自由に行ける力、他心通は人の心持がわかる力、宿命通は前の世の事までわかる力といふのであります。一々の事はどうでも宜いのですが、要するにこの根本は、人間の心に煩惱が無くなるといふと、物事の本當の性質がわかるといふことです。自分の心に煩惱が一パイ塞がつて居ると、眼で見た物の形が本當に見えず、耳で聽いた物の聲が本當に聽えない。心の煩惱が無くなつて初めて眞實の相が見え、眞實の聲が聽え、眞實の人の心持がわかるのであります。であるから五つでも十でもどうでも宜しい。要するに煩惱が無くなつて初めて眞實のものがわかるといふことが所謂通力であります。

どうも吾々は心に煩惱がありますから、その煩惱を根本にして物を見たり聽いたりするので、本當のことが見えませぬ、本當のことが聽えませぬ、昔の笑ひ話でありますが、以前は國技館といふものが無くて、兩國の回向院の境内で相撲を取つて居りました。春場所、夏場所と年に二度ありました。その時

にはあの回向院の前の兩國橋を渡つた所に櫓を掛けて、その上で朝早くから太鼓を叩いて居る。太鼓を叩く方はドヽンコドン〳〵と叩いて居るのですが、その下を通る人の氣分で、その音が違つて聽えるといふ、懷ろに金があつて、相撲でも見ようかといふ裕かな氣分の人が櫓の下を通つて太鼓の音を聽くとその太鼓の音が『入つて來い、入つて來い』といふやうに聽えるといふ。それから懷ろが淋しくて、相撲が見たいけれども金が無いといふ人が下を通ると同じドンドコといふ太鼓の音が『出て行け〳〵』と聽えるといふ。太鼓は入つて來いとも出て行けとも言はないのです。たゞドンドコと鳴つて居るのですが、一方自分の心持で、金があれば入つて來いと聽えるし、金が無ければ出て行けと聽えるといふ。世の中の事はそんなものです。自分の心の持ち方に依つて、物の相、物の聲、物の性質、皆違つて見えるだから心に煩惱がある間は本當の物を見ることが出來ない。本當の聲を聽くことが出來ない。その心の煩惱が無くなつて見ると、初めて本當の物事がわかる。それを神通力といふのであつて、五つとか六つとか別けるのはどちらでも宜しい譯であります。私共は兎角凡夫でありますから、心の煩惱があつて、その煩惱が根本になつて居るものですから、能く物が聽えない、能く物が見えないのです。天氣一つでもわかりはしませぬ。今晩あたり斯ういふ會へ來ようとする、『なんだか西の方が明るくなつて居るから、モウ多分降りはしないだらう』などと思つてしまふ。天氣もわからない、自分の心に煩惱があると總てのものが皆自分に都合の好いやうに見えて、本當の事は見えませぬ。その煩惱を去つて見ると初めて眞實の相が見えて來る。神通を得たいといふのはそれを言ふのであります。五つの神通と言つてありますが、その數はどうでも宜しい、心に煩惱が無くなつた時に、總てのものゝ本當の相がわかるといふこと、それが神通です。

又菩薩の　禪に安んじて合掌し
千萬の偈を以て　諸法の王を讃めたてまつるを
見る

（又見ヒ菩薩　安レ禪合掌　以ニ千萬偈一　讃ニ諸法王一）

『禪』といふことは印度の言葉では『禪那』と言ひます。日本では禪といふ字がお馴染になつて、禪といふ言葉がすぐ『さとり』といふやうな意味に解られますけれども、禪といふ字には少しも覺りといふ意味は無い。これは印度の言葉の發音をたゞ漢字に表はしたゞけの話で、印度の言葉では『禪那』と言ふ。それを漢譯すると『靜慮』と譯します。慮を靜めるといふことです、人間は心を靜めるといふことが何より大事です。慌てゝは何にもなりはしない。慌てるといふことが人生にどれほど累をなして居るかわからない、靜かにどつしりと落着いて物事を考へるといふことが何より大事です。

大正十二年の大地震の時に、恐しい火事が起つて東京の半分を燒き盡しました。所がその火事の起つた原因をだん〳〵考へて見ると、殘らずとは言へませぬが、東京市民の大部分が慌てゝしまつた、慮を靜めることが出來なかつた、慌てゝ飛出してしまつた。モウ少し落着いて居つたら、あの火事はあの半分でも、あの三分の一でも濟んだかも知れない。私の父親が當時生きて居りまして、この火事の話をした所が、『どうも世間の者は困るナ、自分達は昔、侍として育つたのだが、地震があつて外へ駈け出す時には、勝手元へ行つて摺鉢か大きな皿を持つて來て、火鉢やなにかの火のある所に被せて、それから逃出せといふことを敎へられて居つた。だから自分も早速――私の親父は當時私と別居して隱居して居つたのでありますが――摺鉢を持つて來て火鉢の上に被せて逃出した』といふことを申して居りました。これはモウ昔は皆敎へられて居つたのです。

この頃の人は『ソラ地震だ』といふと、すぐに飛出してしまふものですから、ガタンと上から物が墜ちて來ればすぐ火が附いてしまふ。昔はそんな事の無いやうに、火の上には何か置いて逃げろといふことを、平生の心得として教へられたものだといふことであります。それです。靜かに落着いて考へたら、人間の力で、大きな自然の力をすべて喰ひ止めることは出來ないにしても、その損害を小さくすることは出來る筈です。所があの時はそれが出來なかつた皆が慌てゝ飛び出してしまつた。火鉢の火でも瓦斯の火でもその儘にして飛び出してしまつたから、物が墜ちて來れば皆燃えてしまふ。神田橋などは、箪笥や長持で一パイになつて歩けなかつたと言ひます皆家を出る時に荷物を持つて出た。彼處まで來て迚も行けないといふので荷物を棄てゝ行つてしまつたその箪笥や長持に火が附いて燃え上つた爲に、橋も焼け墜ちて大變なことになつた。被服廠の跡で大勢の人が死んだといふことは如何にも傷ましい事であります、後で調べて見ますと、彼處に行く人が皆箪笥や長持や戸棚ナンかを持ち込んで、此處にも箪笥がある、そこにも戸棚がある、その中に火が移つて來たから皆が焼けてしまつた、焼草を周圍に積んで自分で死んだやうなものであります。死んだ人の惡口を言つては濟みませんが、實際さうです。モウ少し落着いて前後を考へたならば、あの慘害は十分の一で濟んだかも知れない、二十分の一で濟んだかも知れない。慮を靜めるといふことが出來ない爲にどれ程人間に累が多いか、慘害が多いかといふことは、今日に於てお互ひが能く考へなければならぬ事であります。

地震の慘害といふやうなことは形だけのことですが、精神上に於ても同じ事でせう。お互ひが慮を靜めて前後を分別したならば、隨分苦しい中、辛い中を平和な心持を以て送ることが出來る筈です。禪と

いふのはそれです。なにも坐禪をすると言つて胡座をかいて考へるばかりが禪ではない、慮を靜めて靜かに前後を考へて見て、慌てず騒がず前後の分別を附けるといふこと、それが本當の禪です。その心の問題を餘所にして置いて、たゞ薄暗い部屋で胡座をかいたりしても何にもなりはしませぬ。私共も學生の時分にやつて見ました。鎌倉の圓覺寺などに行つて坐禪をやつたものです。けれどもたゞ形だけの禪では何にもなりはしない。ジッと坐つて考へて居るといろ〳〵な事を想ひ出します。覺るどころの騒ぎではない、昔の川柳に

坐禪して久しい借りをおもひ出し

といふのがあります。『いつかあの男に五十錢借りたが、まだ返さなかつたナ……』そんなことを想ひ出してしまふ。何にもなりはしない。心の根本を靜める。それが禪那です。

それで禪に安んじて、慮をジッと靜めて佛樣をお讃め申すといふやうな氣分になると、その佛の境界に近づいて行きますから、どんな境遇の變化があつても、周圍がどんなに動いて來ましても、そんな變化に驚かない、その影響を受けないやうになつて行く、これが佛道修行の一つの方法です。

復た菩薩の　智深く志固くして
能く諸佛に問ひたてまつり　聞きて悉く受持す
るを見る

（復見菩薩　智深志固　能二問諸佛一　聞悉受持上）

これも大事なことです。『智深く志固く』といふのは大變良い言葉です。智慧といふものは深くなければいけない、物の表面だけ見て居たのでは本當のことはわからない。物に深入りしなければいけない。いろ〳〵な事を知つて結局何にも知らないといふ人があります。あれもこれも知つて居る、けれども表面だけで本當の事がわからない。それでは幾ら智慧があつても何にもならないのであつて、智慧は

深くなければいけませぬ。物事をズッと奥の奥まで見透すといふやうにならなければ、智慧といふものは役に立たない。自動車に乗つて上野や飛鳥山を駈け廻つて、サッと通つて花見をしても、花の綺麗な所はわからない、降り立つて静かに花を見て歩いてそれで初めて花の綺麗なことがわかる。表面を急いで見たのでは何もわかるものではない。人生の事もその通りです。ですから智は深くなければいけない物事を根柢まで見透すといふことを考へなければ、物を知つたといふ效は無い。

さうして志は固くなければならない。人間は斯うやりたいといふ希望はいろ〳〵有つて居ります。希望は有つて居りますけれども、何か障碍があるとすぐその希望を捨てゝしまふ。それでは一生涯何にも出來ませぬですから、志は固く、一旦志した事はどんな艱難があつても、どんな面倒があつてもそんな周圍の變化に負けないで、一旦志した事は

飽迄やり遂げよう。斯ういふ心持にならなければならぬ。ですから『智深志固』僅か四字ですけれどもなか〳〵良い言葉です。これでなければ人生の事は何も出來るのではない。

さうして佛樣の教を受けて、その教へられた事は悉く受持する。自分がそれを受けて持つて行く。受持といふことに就て支那の天台大師が斯ういふ事を言つて居ります。

信力の故に受け
念力の故に持つ
（信力故受念力故持）

受けるといふのは『成程斯うだナ』と思ふことですが、それを信ずる力がなければならぬ、一通りわかつたゞけではいけない。『成程これは佛樣の仰しやつた事だから間違ひないだらう』斯う信ずる。その信ずる力がありますと、これを受けると言つて、その教を自分のものとして受け入れることが出來ます

けれどもどうも凡夫の習ひとして、信ずるといふことが永續きしないと困りますから、そこで念力と言つて、念はその信じた事を幾度も〳〵想ひ出して、これを忘れないやうに努める。その念ずる力がありますと、持つと言つてその信仰が永續きがします。ですから『受持』と言つて、信ずることゝ念ずることに依つてこれが永續きがする。　日蓮聖人も

受くるはやすく持つはかたし、さる間成佛は持つにあり

『成程尤もだナ』と思ふことはやさしいけれども、それを永く續けるといふことは難かしい。だから佛に成る道は持つにありと仰しやつた。『ア、有難いナ』と思ふのは誰でも出來る、けれどもそれが永續きしなければ何にもならない。だからそれを持つて幾度も繰返し考へて、その信じた事を後になつてぐらつかないやうに、後になつて弛んでしまはないやうにするといふことが、所謂持つといふことであります。本當に持たなければいけない。誰でも惡人でない以上は、善い事を聽けば善いとは思ひますけれども、その善いと思ふことが永續きしない。續かなければ何にもならない譯です。一時ハッと思つたゞけではそれは思はないよりましでありませうけれども、大きな力にはなりませぬ。その思つた事を持ち續けることが大事です。その事を茲に申して居る。受持すると言つて、佛の教を心に信じ、身に持つていつ迄も續けて行くといふ者の相が見える。さうあつて初めて本當の信仰が出來ようといふのであります。

この偈の中に列べて說かれてある事柄は、これを遠い昔のこと、思はないで、一々現在の吾々の行爲に適切な事柄でありますから、これを模範として各々の信仰を持つて行くといふ風にするならば、お經の言葉と自分の日々の生活とが一致して參ります。斯くしてはじめてお經を讀んだ效があると言へるわけであります。

今日はこれから茶話會を催されることになつて居りますから、講義はこれだけにして置きまして、いろ〳〵皆さんの御感想などを伺ふことに致します。

（第九講了）

記事

本部團報

八月は一般に暑中休暇で、或は山に、或は海にと避暑さるゝのが、慣例のやうでありますが、本部に於て昨夏は、毎朝勤行と法話を三十一日間團友と共に修行させて頂いたけれ共、本年は　本多上人の大藏經續刊に關する原稿の經文對照や、其發表の必要上、教務部有志で、ある時は早朝から、ある時は深夜迄汗だくになつて奉仕させて頂いた。併しこれは惟れなか〳〵の大淨業でありますから、宜しく愼重に愼重にと練つて、其完璧を期したいものである。而してそこには各種の魔障が續々として顯はれて來ませう。現に今もあるが、私共はそれを以て彌々喜を感じ、勇精あるのみ。

今一つは　日生上人のレコード複製を企てた處、各方面から御注文が續々として迫り、其の發送にこれ又大多忙であること、一面に於ていひ知れぬ法悦に滿されます。

横濱教誌

當地、七月中の集りは左の如くであつた。

○**四　日**夜　神奈川區篠原町佐藤方にて『受難と信仰』磯部先生。

○**九　日**夜　磯子區磯子町高橋氏方にて、小西上人、磯部先生の御法話。

○**十三日**　小西上人、磯部先生、及び有志の人々が、朝早くから終日、當地各會員の宅を盂蘭盆の靈祭のために巡廻供養をされた。齊明天皇の御宇、飛鳥寺に於いてそも〳〵始められたと云ふ盂蘭盆會は、時代の下ると共に全く民間行事の欠くべからざる一ツとなり、『この夕ぐれは、亡き人の來る玉祭るわざとて、鼠尾草折しきて、瓜、茄子、をかしげに枝豆かれがれに、折掛燈籠かすかに、棚經せはしく、むかひ火に麻がらの影消えて…』云々との西鶴の筆は、今の私共にも、尙、こよなくなつかしい、朝から霽陶しく細雨の降り煙るその日ではあつたが、私共の心は、盆の廻向に、一きはスガ〳〵しかつた。

○**十四日**　中區扇下の齋田氏方にて、新盆會磯部先生。

○**二十一日**夜　神奈川區青木町岩井氏方にて小西上人、東京より御來講。

○**二十四日**夜　磯子區磯子町北山氏方にて、『大聖の忍辱行』磯部先生。

新加盟者

東京市淺草區新福井町　小金　德藏殿
同　蒲田區雜色町　大原　行道殿
同　豐島區池袋町　佐藤大太郎殿

（誌友より團員へ）

東京市深川區森下町　白畑　庄治殿

（磯部氏御紹介）

布哇ホノルヽ市　中村　ツユ殿
同　木村　正雄殿
同　竹内チエノ殿
同　横井　シナ殿

（日比野妙鏡氏御紹介）

寄附金維持及團費誌料領收

（自七月二十一日 至八月二十日）

一金五圓也	山梨縣	山本禮三郎殿
一金貳圓貳拾錢也	東京	長澤　信一殿
一金拾圓也	同	小金　德藏殿
一金壹圓也	横濱	岩澤　理八殿
一金參圓也	東京	大原　行道殿
一金拾圓也	同	白畑　庄治殿
一金七圓也	郡山	五十嵐治郎左衞門殿
一金壹圓也	東京	小峰　登子殿
一金貳圓五拾錢也	同	佐藤大太郎殿
一金壹圓貳拾錢也	同	松井　泰一殿
一金貳圓貳拾錢也	同	川勝彙次郎殿
一金參圓也	同	菊地　孫三殿
一金壹圓貳拾錢也	同	犬塚　誠殿
一金貳圓貳拾錢也	岡山縣	岡野コキヨ殿
一金七圓六拾錢也	東京	谷川　林助殿
一金七圓也	同	坂爪德太郎殿
一金六圓四拾錢也	同	鈴木　信愛殿
一金貳圓貳拾錢也	千葉縣	山田喜之亟殿
一金貳圓貳拾錢也	東京	福原　倫殿
一金貳圓五拾錢也	福島	岩井　需殿
一金貳圓五拾錢也	同	金澤　利江殿
一金貳圓五拾錢也	同	中村與四郎殿
一金貳圓四拾錢也	横濱	杉本　光衞殿
一金拾七圓五拾錢也	布哇	日比野妙鏡殿
一金貳拾圓也	東京	柴田　武治殿
一金貳圓也	同	沼部彌太郎殿
一金貳圓貳拾錢也	福井縣	宮川　日見殿
一金拾參圓也	布哇	中村　ツユ殿
	同	木村　正雄殿
	同	竹内チエノ殿
	同	横井　シナ殿
一金參拾圓也	横濱	平岡宗次郎殿
一金貳圓也	東京	雪野　すえ殿
一金參圓也	同	木村　日保殿
一金貳圓貳拾錢也	千葉縣	廣部　乾山殿
一金參圓也	東京	金指　倫吉殿
一金壹圓貳拾錢也	福岡縣	秋山　照代殿

右難有入帳仕候

財團法人統一團會計

念告

從來本部に於ては正團員も單なる本誌購讀者も同一金額を以て御清擬相仰ぎ居申候處彌々時代の趨勢に鑑み愛に本團は先づ本誌の增大を圖ると共に正團員と誌友とを區別すべき必要相認め申候に付本誌卷頭略則御諒承の上爲法圖爲一切衆生可相成團員として何卒御賛助あらんことを偏に奉悃禱候

財團法人　統一團

新刊

觀心本尊鈔讃仰

前立正大學長　清水龍山先生述（日蓮聖人御遺文全集講義別卷）

菊判　布裝　壹百餘頁
全一冊　定價　金九拾錢
郵稅　金八錢

觀心本尊鈔四十五字の法體段は、實に一鈔の骨髓宗義の心腑なり。前立正大學長清水龍山先生大學に本鈔を講述せらるゝこと茲に三十年、頃日學徒の爲めに大學學報第八十二號に「觀心本尊鈔委義一四十五字法體大旨」を寄せ古今人の異義を破立せらるゝや、山川智應氏此に應酬する所あり。先生更に第二、三篇論評續稿、族鼓堂々龍攘虎擊の概あり。先生が夙に近代宗學の泰斗倭陀那和上の學統を繼紹、更に獨創發揮以て、宗學の大成を企圖せらるゝは天下悉知の所、爰に幹事が先生の赤誠に感激、宗學の興隆に資するの微志に出づるのみ。特に本書は直に先生の談論稿を請うて之を公刊する、偏に先生の御擔任の本鈔講義の懸譚なり、乃ち敢て此書を吾會員否昔く宗學界に切に推薦する所以なり。

立正大學教授　高田惠忍先生著

第二版

日蓮宗の安心

四六判　裝幀クロス美本
全一冊　紙數四百二十餘頁
定價　金壹圓五拾錢
郵稅　金拾四錢

今般第二版發行に際し新に清水、山川兩先生本尊鈔對論に付き二十頁の論文を增補す。

大乘佛教の生粹法華思想の最尖端に發揮されたる本覺法門として「日蓮宗の安心」を詳說餘蘊なきもの卽ち本書なり。その第二版の序言たる、清水、山川二家對論讀後の感龍に於ける點睛たり、讀前その唯一の手引書に値するの要論たるを失はす。而も是唯「安心」の源淵より流出し來る涓々の支流たり、淙々の潤泉にさへ外ならず。けだし緣陰銷暑の好伴侶たらすとせんや。叩けよ信の扉は開かれん。求めよ靈の涼味は津々として人の骨に徹せむ。

前日蓮宗大學教授
本山妙覺寺貫主　藤田文哲上人著

新刊

唱題成佛論

菊半截　定價　金四拾錢
全一冊　郵稅　金四錢

碩學藤田上人が尤も得意の論說たる唱題成佛論、その上梓を待望せらるゝや久し、今や機熟して世に出づ。本宗教學の中樞にして吾人が信仰の理想境たる「唱題成佛」を理論と實際に亙りて詳細に舒述せしものなり。價俗を問はず一讀行學の羅針とせられんことを望む。

發行所　平樂寺書店
京都市中京區東洞院通三條上ル　振替口座一三〇六〇五　電話局本三四三一

本多日生上人名著在庫品特價提供

一聖語錄改版　特價金壹圓八拾錢　送料共金貳圓拾錢
一日蓮主義本領　賜天覽　金貳圓五拾錢
一法華經要義　金壹圓五拾錢
一日蓮主義心髓　金壹圓五拾錢
一日蓮主義精要　金貳圓九拾錢
一佛教の本質と其價値　金貳拾五錢
一法華經要品　金五拾錢

磯部滿事謹輯
一本多日生上人　特價金壹圓七拾錢　送料共
一勤行作法　金拾錢

以上施本用として多數御引取には特別便宜御相談申上候

財團法人
東京市小石川區音羽町六ノ一七
統一團出版部
振替東京九四二〇番

一月刊「教」誌
定價一冊　金拾錢
送料　金五厘
一ヶ年前金　金壹圓貳拾錢　送料共
申込所　東京市小石川區音羽町六ノ一七「教」發行所
振替東京一〇九四〇番

統一定價
一冊　金貳拾錢　送料壹錢
半ヶ年　金壹圓貳拾錢
一ヶ年　金貳圓貳拾錢　送料共

注意
▲御申込ハ總テ前金ノ事
▲前金相切候節ハ包紙ニ其旨表示可致候
▲御轉居ノ場合ハ必ズ新舊共直ニ御通知ノ事

昭和九年八月廿四日印刷納本
昭和九年九月一日發行
（第四百七十四號）

東京市小石川區音羽町六ノ一七
編輯兼發行人　磯部滿事
印刷人　鈴木日雄
東京市品川區南品川二ノ一八一
印刷所　都印刷所
電話高輪六〇二四番

不許複製

東京市小石川區音羽町六丁目一七
發行所　財團法人統一團
電話牛込五三三六番
振替東京九四二〇番

目次

日蓮主義（後篇）……日生上人
日蓮教學講座（第十三回）……河合陟明
日什大正師御聖蹟顯彰に就て……中村謙藏
法華經講話（第十講）……小林一郎
記事
○團報と教信
○寄附團費誌料領收

第三十九年十月號